

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第246集

Y A U R A

# 家浦遺跡Ⅱ

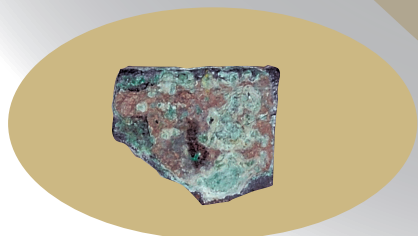
長野県佐久市下小田切家浦遺跡 第2次調査

2017.3

佐久市教育委員会



M1 号溝址出土銅鏃及び不明銅製品



南調査区出土銅碗及び建築材

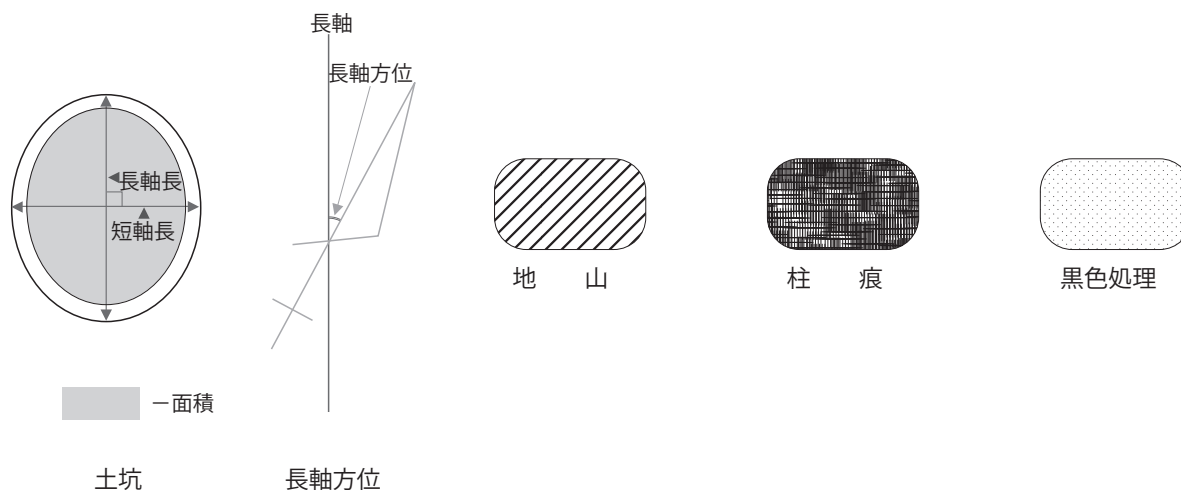


## 例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する家浦遺跡の第Ⅱ次発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野県佐久建設事務所が行う道路築造工事（社会資本整備総合交付金（道路）事業）に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 家浦遺跡Ⅱ（SYAⅡ）佐久市下小田切865-1他
- 4 調査期間及び面積 発掘調査：平成28年7月25日～8月17日  
整 理：平成28年8月18日～平成29年3月31日  
調査面積 250㎡
- 5 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1：2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。
- 6 本書に掲載した遺構図は、簡易遣り方測量で作成したものを、Adobe Illustrator でデジタルトレースを行った。
- 7 遺物実測図は手取りで行い、Adobe Illustrator でデジタルトレースを行った。
- 8 遺構・遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、Adobe Photoshop で補正等を行った。
- 9 本書の編集は Adobe InDesign で行った。
- 10 本書の作成・編集は小林が行った。
- 11 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略記号は竪穴住居址－H、掘立柱建物址－F、土坑－D、溝址－M、ピット－Pである。
- 2 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4 を基本とする。これ以外ものは挿図中のスケールを参照されたい。
- 3 遺構の海拔標高は、遺構毎に統一し、水糸標高をスケール上に「標高」として記してある。また、土層の色調には1999年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 4 遺物挿図番号・遺物写真番号・遺物観察表番号は一致する。
- 5 調査区グリッドは公共座標の区割りにしたが、間隔は4m×4mで設定した。
- 6 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
- 7 挿図中における網掛は以下の表現である。



# 目 次

第 I 章 発掘調査の経緯	1
第 1 節 調査の経緯	1
第 2 節 調査体制	1
第 3 節 遺跡周辺の環境	1
1. 遺跡の地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	1
3. 基本層序	4
第 4 節 検出遺構・遺物の概要	4
第 II 章 遺構と遺物	4
第 1 節 土坑	5
D 1 号土坑	5
D 2 号土坑	5
D 3 号土坑	5
第 2 節 溝址	6
M 1 号溝址	6
第 3 節 ピット	7
第 4 節 遺構外出土遺物	7
第 III 章 まとめ	21
写真図版	
D 1・D 2 号土坑	22
D 3 号土坑・M 1 号溝址	23
北側調査区全景・遺構出土遺物	24
南側調査区全景・遺構外出土遺物 (1)	25
遺構外出土遺物 (2)	26
遺構外出土遺物 (3)	27
遺構外出土遺物 (4)	28
遺構外出土遺物 (5)	29
遺構外出土遺物 (6)	30
報告書抄録	
奥付	

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 調査の経緯

長野県佐久建設事務所は社会資本整備総合交付金（道路）事業を下小田切地域において計画し、文化財保護法第 94 条第 1 項及び文化財保護法施行令第 5 条第 2 項の規定に基づく届出を長野県教育委員会に行った。これを受け佐久市教育委員会は平成 27 年 11 月 17 日から平成 28 年 3 月 26 日にかけて断続的に試掘調査を実施し、家浦遺跡内において遺構を検出した。保護協議の結果、250㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成 28 年 7 月 5 日に埋蔵文化財発掘調査契約を締結し、平成 28 年 7 月 25 日～8 月 17 日の期間発掘調査を行った。同年 8 月 18 日～平成 29 年 3 月 31 日の期間整理作業を行い、本書を刊行した。

## 第 2 節 調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	糊澤晴樹
事 務 局	社会教育部	部長	荻原幸一
	文化振興課	課長	三石 建
		企画幹	小林登志朗
	文化財調査係	係長	大塚広樹
		係	小林眞寿 富沢一明 上原 学
			神津一明 生島修平
		臨時職員	森泉かよ子
調査担当者	小林眞寿		
調 査 員	浅沼 勝男 岩松 茂年 小林喜久子 小林 節子 小林 妙子 清水 律子		
	副島 充子 田中ひさ子 橋詰 勝子 橋詰 信子 花岡美津子 細谷 秀子		
	堀籠 滋子 宮川真紀子 柳澤 孝子 山口ひとみ 山田 叔正 油井 満芳		

## 第 3 節 遺跡周辺の環境

### 1 遺跡の地理的環境

遺跡は県道上小田切・白田停車場線をほぼ南北の中心線として不整な楕円形に展開し、標高は 720 m 前半台である。西を仲沢川、東を片貝川に挟まれた平野部分に立地するが、蓼科山麓の尾根端部がこの平野に西・南・東の 3 方向からのびており、複雑な微高地が展開する。旧白田町の千曲川左岸地域において最大の平野部がこの地域である。水利の便もよく、大半の面積は水田であるが、山裾部分は果樹園を中心とした畑地に利用されている。

### 2 遺跡の歴史的環境

第 3 図に示したように、家浦遺跡周辺には数多くの遺跡が存在する。平成 17 年の合併以前の旧白田町時代に行われた遺跡発掘調査は少なく、合併後も大規模な開発事業が計画されなかったため、発掘調査例は少ない。そのような中で、中部横断自動車道に伴う調査が長野県埋蔵文化財センターにより行われ、この地域の様相の一端が明らかとなりつつあるが、正式な成果はまだ公表されていない。

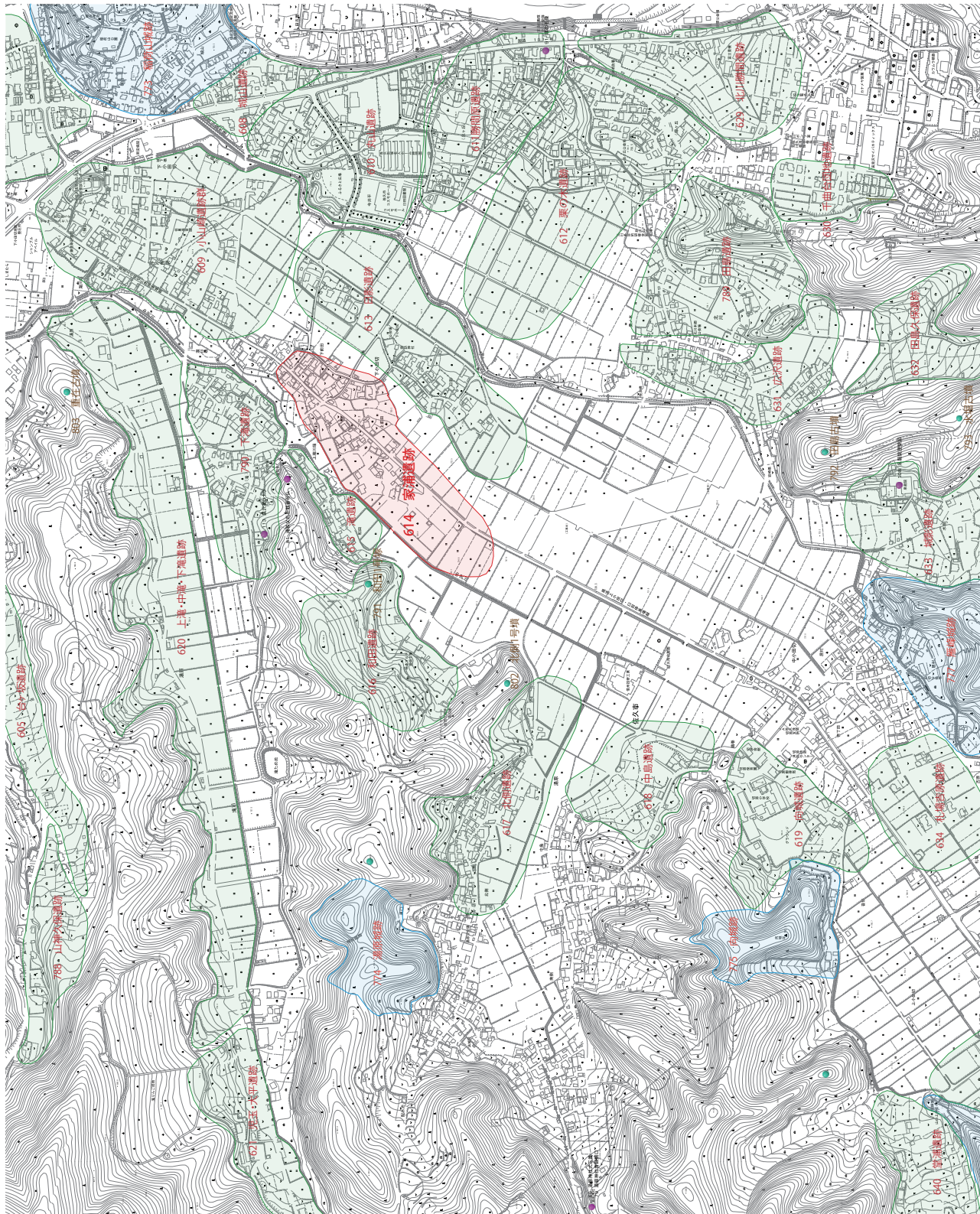
遺跡周辺におけるもっとも古い発掘資料は「白田トンネル産古型マンモス化石」であるが、これは100万年前のものであり、人類は出現していない。旧石器時代の遺跡は、下小田切集落のはるか西方の山林部分に所在する大曲遺跡で黒曜石製の石核が発見されている他は現在までのところ未発見である。縄文時代の遺跡は上滝・中瀧・下瀧遺跡で早期及び中期の土器が採取されている。城山遺跡・丸山遺跡・勝間原遺跡・小山崎遺跡群・広沢遺跡・田島久保遺跡・札幌吉原遺跡などで中期～後期の土器が採取されており、小山崎遺跡群反田遺跡では平成18年に発掘調査が行われ、中期後半の住居址が検出された。弥生時代の遺跡は丸山遺跡・勝間原遺跡・栗ノ木遺跡・五里久保遺跡・広沢遺跡・和田遺跡などが存在する。何れも後期箱清水式の土器が採取されている。勝間原遺跡では昭和62年に発掘調査が行われ、住居址2軒・溝址1条が検出され、和田遺跡では平成21年に発掘調査により住居址1軒が検出された。また、丸山遺跡では平成25年に発掘調査が実施され、土坑3基が検出された。古墳と思われる墳丘が平野部に突き出した尾根端に多く存在するのも白田地区の特色であるが、調査により墳墓ではなく、時期的にも後世のものであることが長野県埋蔵文化財センターの調査で明らかとなってきた。採取される土器は破片であり、古墳時代の遺跡と断言できるものは現在のところない。奈良・平安時代の土器は周辺のほとんどの遺跡から採取されており、この時期にな



第1図 家浦遺跡IIの位置



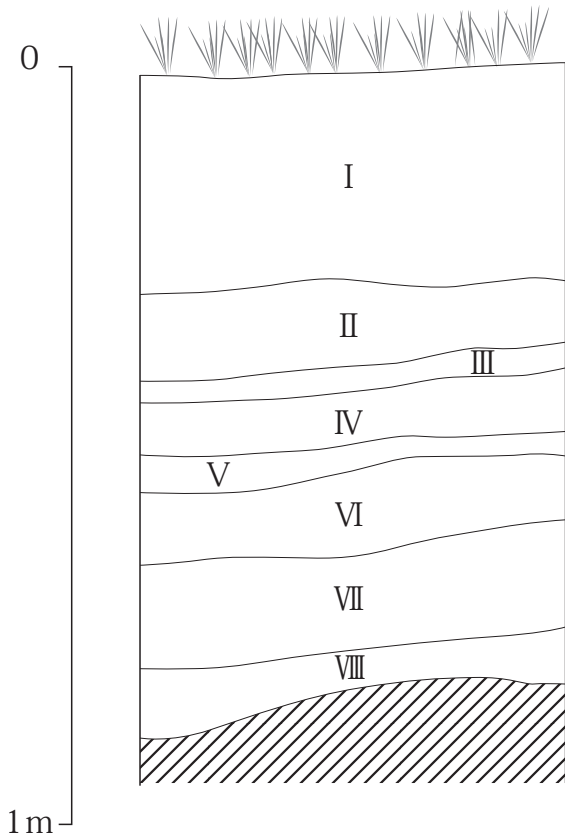
ると人々の活動が活発になるようである。中世鎌倉時代(1279年)には、小田切の里の「或る武士の屋形」で一遍上人が踊り念仏を始行している。中世の遺跡としては佐久地方全域の特徴ではあるが、山城が多く点在する。小田切氏の居城である雁峰城跡は小田切氏が水内郡に移った後、草間氏が守ったと伝えられ、陽雲寺がその居館と考えられている。これと対峙する位置には向城跡が存在する。雁峰城攻略のため武田信玄が



第2図 周辺遺跡分布図

築いたという伝承が残る。向城跡の南西の尾根端部には上小田切城跡があり、付近には大門や「将監在家(しょうもんぜいけ)」などの地名が残っている。依田氏の築城と伝承されている。家浦遺跡の西方の山頂には湯原城跡が存在する。湯原氏の城であったが、後に相木氏(依田氏)が拠ったとされる。城の東北方に城主の墓地と伝承される宝篋印塔が2基あり、この付近が旧湯原神社社地とされている。ここから出土した青銅鰐口には「弘治三年丁巳十二月吉日 依田与七郎長繁」の印刻があり、現在湯原神社に納められ佐久市有形文化財に指定されている。遺跡南方に位置する稻荷山城跡は武田氏の築城とされるが、徳川氏が修築をしたと伝えられ、文献には勝間反砦と記されている。以上のようにこの地域は平安時代から戦国時代にかけて栄えた場所であり、佐久地域の歴史上重要な場面に幾度となく登場している。

## 第4節 基本層序



第3図 基本層序模式図

基本層序は第3図のとおりである。I層は耕作土(水田耕作土)、II層は緑灰色土層(5G6/1)で所謂「床土」であるが、鉄分の沈殿はあまり顕著ではない。III層は灰黄褐色土層(10YR4/2)で圃場整備以前の水田耕作土と思われる。IV層はにぶい黄橙色土層(10YR6/3)、V層は灰白色土層(10YR8/2)シルト質土、VI層は灰黄褐色土層(10YR6/2)、VII層は灰黄褐色土層(10YR4/2)III層に近似するが砂利を含む。VIII層は黒褐色土層(10YR3/2)、VIII層下が地山であり、灰白色シルト層(7.5Y8/2)に砂利が含まれている。遺構が存在する北側調査区はI層下に所謂「床土」形成され、III・IV層と堆積し、にぶい黄褐色シルト質土層(10YR5/3)が堆積し、その下層に地山が存在する。遺構はIII層上面から掘り込まれているが、にぶい黄褐色シルト質土層(10YR5/3)の上面まで下げ検出を行った。南側調査区は低湿地部分であり、出水量が多い。遺構は存在しないが、遺物はIV層からVII層にかけて出土する。木材の出土はVII層が中心であった。III層より下層からはゴミ等の出土は認められず、圃場整備工事を含む後世の攪乱は受けていないものと思われる。

## 第4節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

- 遺構 土坑3基、溝址1条、ピット57基、遺物包含層1カ所
- 遺物 弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、木製品、銅器・銅製品、獣骨

# 第II章 遺構と遺物

# 第1節 土坑

## ●D1号土坑 (第4図)

Ⅲ-B-1グリットで検出された。P57を切る。平面楕円形、断面逆梯形の形態で、N-34°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.12m、短軸長0.63m、壁残高0.19m、面積0.39㎡の規模である。

遺物は底部ヘラケズリ、内面ヘラミガキ後黒色処理が施される土師器坏の底部片が1点出土しており、平安時代9世紀の所産と思われる。

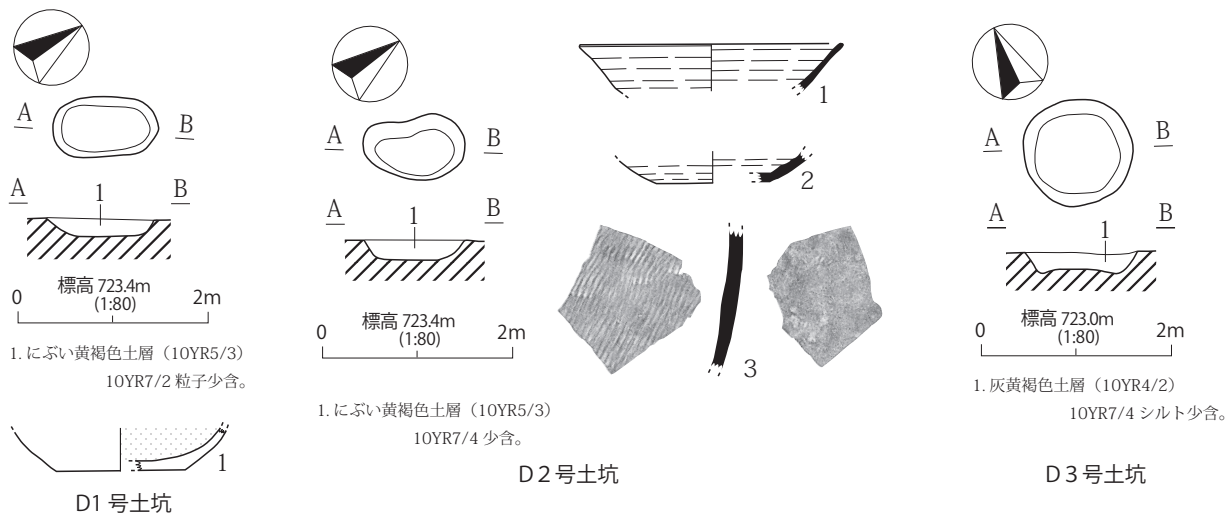
## ●D2号土坑 (第4図)

Ⅲ-B-1グリットで検出された。P39、M1号溝址を切る。平面不整な楕円形、断面逆梯形の形態で、N-39°-Eに長軸方位をとる。長軸長1.08m、短軸長0.63m、壁残高0.35m、面積0.29㎡の規模である。

遺物は須恵器の坏2点と甕片が出土している。坏1は外面に火樨痕が認められる。2は底部に回転糸切痕を残している。3の甕は外面に平行叩目痕が認められ、内面の当具痕にはナデ調整が施されている。平安時代9世紀の所産であろう。

## ●D3号土坑 (第4図)

Ⅳ-I-2・3グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。平面円形、断面逆梯形のの平面形態であるが、底面の外周が周溝に僅かに凹んでいる。長軸長1.20m、短軸長1.17m、壁残高0.25m、面積0.64㎡の規模である。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。



第4図 D1・D2・D3号土坑

第1表 土坑計測表

遺構名	検出位置	重複関係	平面形態	長軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積
D1	Ⅲ-B-1	P57を切る	楕円形	N-34°-E	1.12	0.63	0.19	0.39
D2	Ⅲ-B-1	P39・M1を切る	楕円形	N-39°-E	1.08	0.63	0.35	0.29
D3	Ⅳ-I-2・3		円形		1.2	1.17	0.25	0.64

第2表 D1号土坑出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内面	外面		
1	土師器	坏	-	(6.8)	<2.2>	-	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	W区

第3表 D2号土坑出土遺物観察表

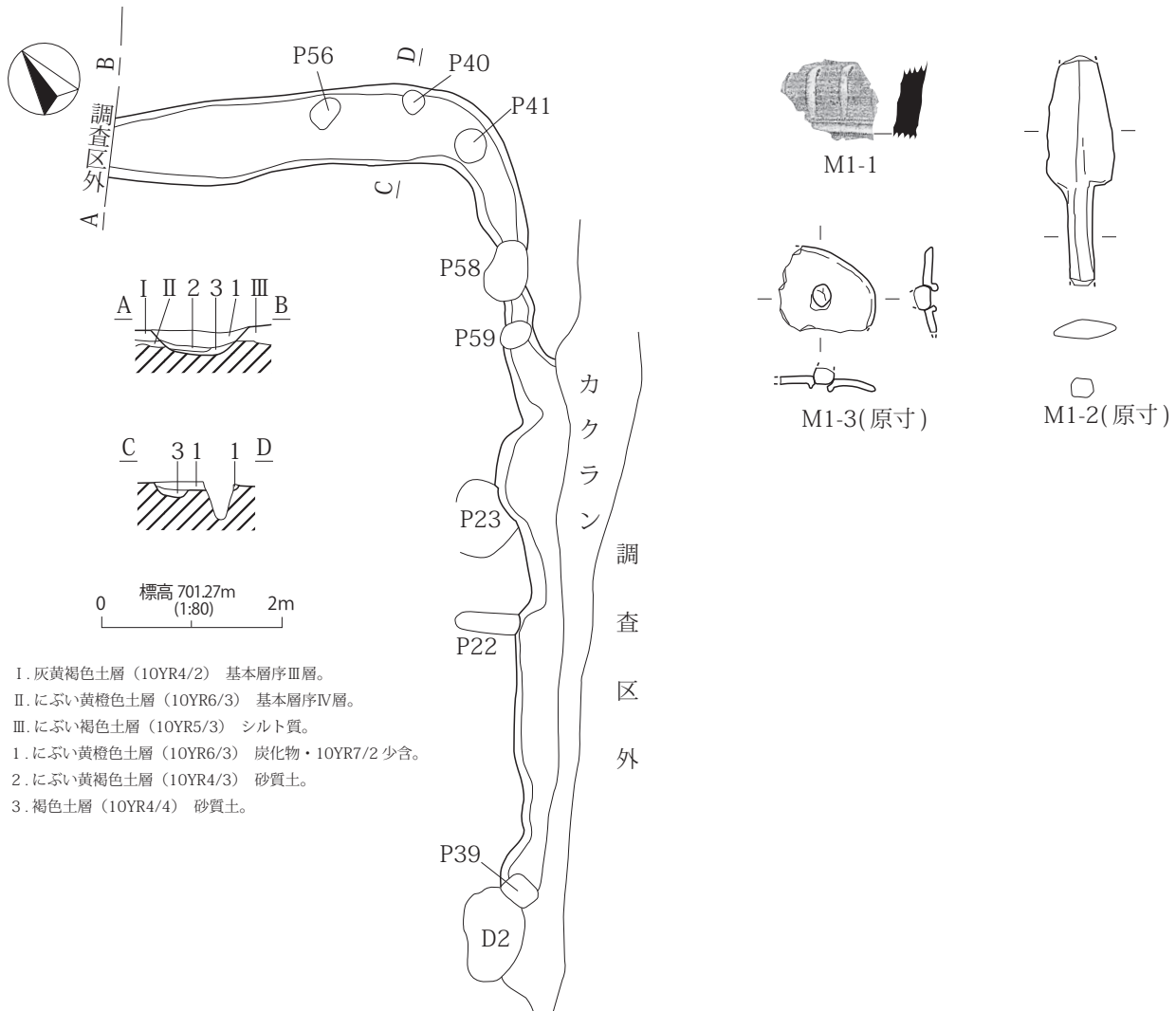
No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内面	外面		
1	須恵器	坏	(14.0)	-	<2.6>	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	E区
2	須恵器	坏	-	(6.0)	<1.6>	-	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	E区
3	須恵器	甕	-	-	-	-	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	E区

## 第2節 溝址

### ●M1号溝址（第5図）

北側調査区の南西部、IV-I-2、IV-J-1・2、III-A-1・2、III-B-1グリットで検出された。D2号土坑、P22・23・39・40・41・56・58・59ピットに切られる。ひとつの端部は、IV-I-2グリットの北西方向の調査区外にのびている。もう一方の端部もIII-B-1グリットで攪乱に切られ消滅しており、全容は不明である。IV-J-2グリットで直角に曲がっており、方形の平面形態を呈する可能性がある。幅の最大値は0.96m、最小値は0.33mで一定しない。深度は最大で0.5m前後あるが、検出面からは20cm程度しかない。

遺物は沈線文が施される須恵器甕の頸部片と、銅製の鏃、及び器種不明の銅製品が出土している。混入品と思われる須恵器甕片の沈線文はあまり類例を知らない。外面にカキ目、内面にはロクロナデが施される。平安時代の所産である。銅鏃は小型で、佐久市では4例目の出土である。器種不明の銅製品は緩やかな湾曲を持つ板状部分に鋌状のものが打ち込まれている。銅鏃と共に出土しており、同時期のものと思われる。さて、本址の時期であるが、出土銅鏃の形態・規格は静岡県静岡市川合遺跡出土例に近似しており、弥生時代後期のものと考えられる。本址の性格についてであるが、方形周溝墓である可能性が極めて強いものと思



第5図 M1号溝址

第4表 M1号溝址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内 面	外 面		
1	須恵器	甕	—	—	—	—	ロクロナデ	カキ目→沈線文	破片実測・拓本	II区
2	銅器	鍬	<3.2>	1.0	<0.3>	<2.45>	先端茎部欠損		完全実測	覆土
3	銅製品	不明	<1.2>	<1.3>	<0.25>	<1.07>	左 or 下部欠損か, 厚さ 0.1 の銅板に φ 0.3 の鉋		完全実測	覆土

第5表 ピット出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内 面	外 面		
1	須恵器	甕	—	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	破片実測・拓本	P35 覆土
1	土師器	武蔵甕	(12.0)	—	<3.5>	—	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	P39 覆土
1	須恵器	有台坏	—	(10.4)	<1.5>	—	ロクロナデ	ロクロナデ→付高台	回転実測	P54 覆土
1	弥生土器	甕	—	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	P57 覆土

われる。

### 第3節 ピット

#### ●ピット (第6・7図)

出土遺物を伴うものは少ない。概して小型で円形の平面形態、逆梯形の断面形態のものが多い。時期的には平安時代から中世の所産であろう。詳細については表を参照されたい。

### 第4節 遺構外出土遺物

#### ●土師器 (第8・9図)

坏 (1～17)、碗 (18～20)、皿 (21・22)、甕 (57～62)、壺 (63)、内耳鍋 (64) の器種が認められる。坏の大半は内面ヘラミガキ後黒色処理で、ロクロからの切り離しは回転糸切と思われるが、切り離し後ヘラケズリ調整を施すもの (3・5・6・11～13) も多い。碗・皿も坏同様であるが、20は高台の形状、内面の放射状暗文など異質であり、甲斐系の土器かも知れない。また、2や22のように内外面に黒色処理が施されるものも存在する。甕は武蔵甕 (58・59) とロクロ甕 (57・60・61) が認められる。壺は内外面にヘラミガキ調整が施される63が1点出土している。総じて、坏・碗・皿以外の器種は出土量が少ない。64の内耳鍋は1点のみの出土である。小径のピット群に伴う遺物であろう。墨書が10・15～17の4点に認められた。10の「M」が魔除け記号と思われる以外は、細片であり判読できない。

時期的には平安時代9世紀第代を中心とする土器群である。

#### ●須恵器 (第8～10図)

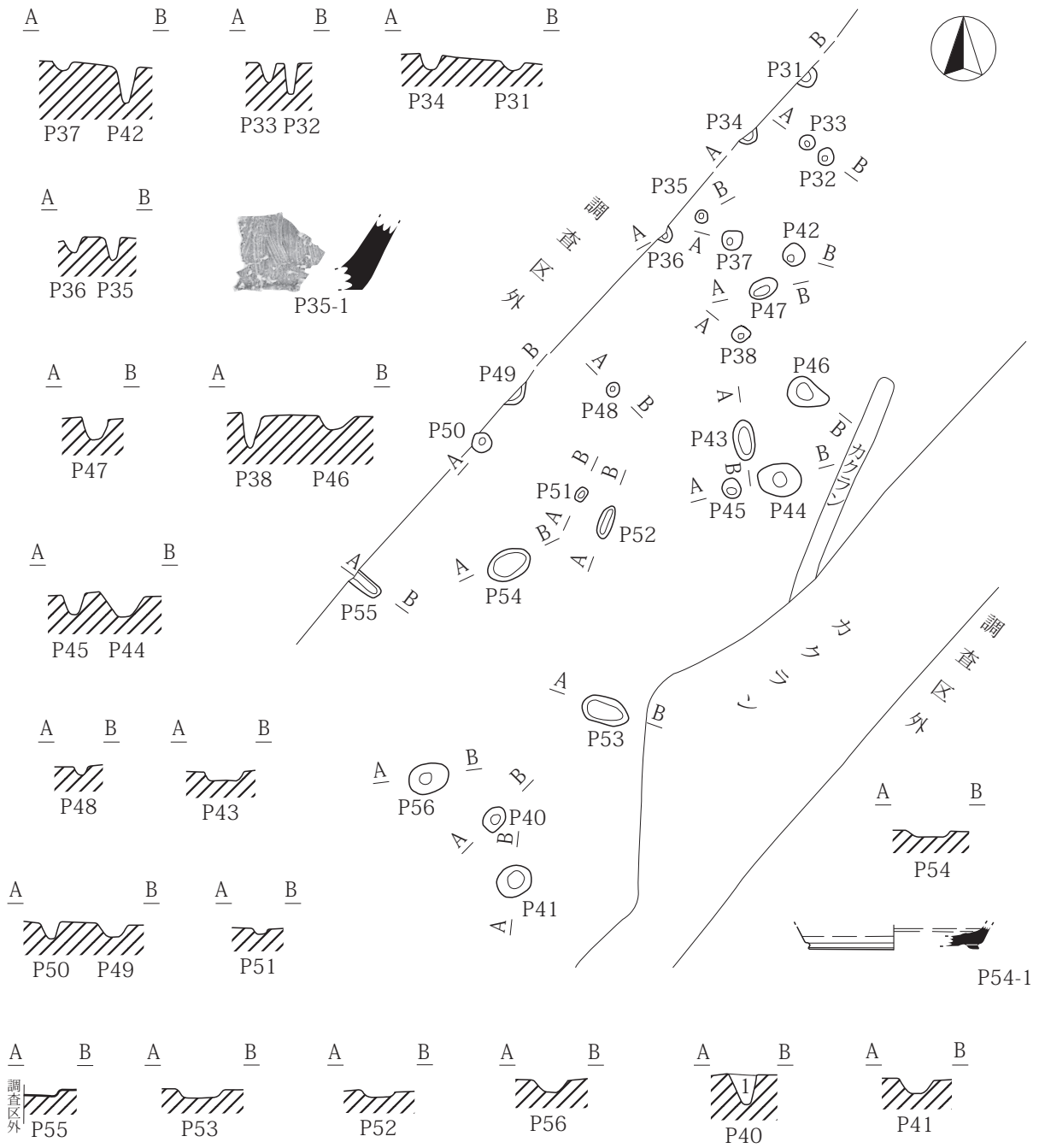
坏 (23～54)、有台坏 (55)、坏蓋 (56)、甕 (65～77)、壺 (78～82) の器種が認められる。坏はロクロから切り離しに回転糸切を用いるものが大半である。少数ではあるが、30・47・50は回転ヘラ切、ないし回転糸切後にヘラケズリ調整を加える。火襷痕が顕著なことも特徴と言える。有台坏、坏蓋は各々1点の出土であった。墨書が37・43・52～54に認められる。52は「佐」であろうか?他のものは判読できない。甕は頸部が短い鉢状のものと長いものが存在する。外面に平行叩目、内面に当具痕を残す。壺は長頸壺と凸帯文付四耳壺、短頸壺が存在する。80は所謂「上野型有蓋短頸壺」、82は凸帯文付四耳壺のほかは長頸壺と思われる。

土師器同様に、時期的には平安時代9世紀第代を中心とする土器群である。

#### ●灰釉陶器 (第10図)

83・84の壺が出土している。何れも長頸瓶である。

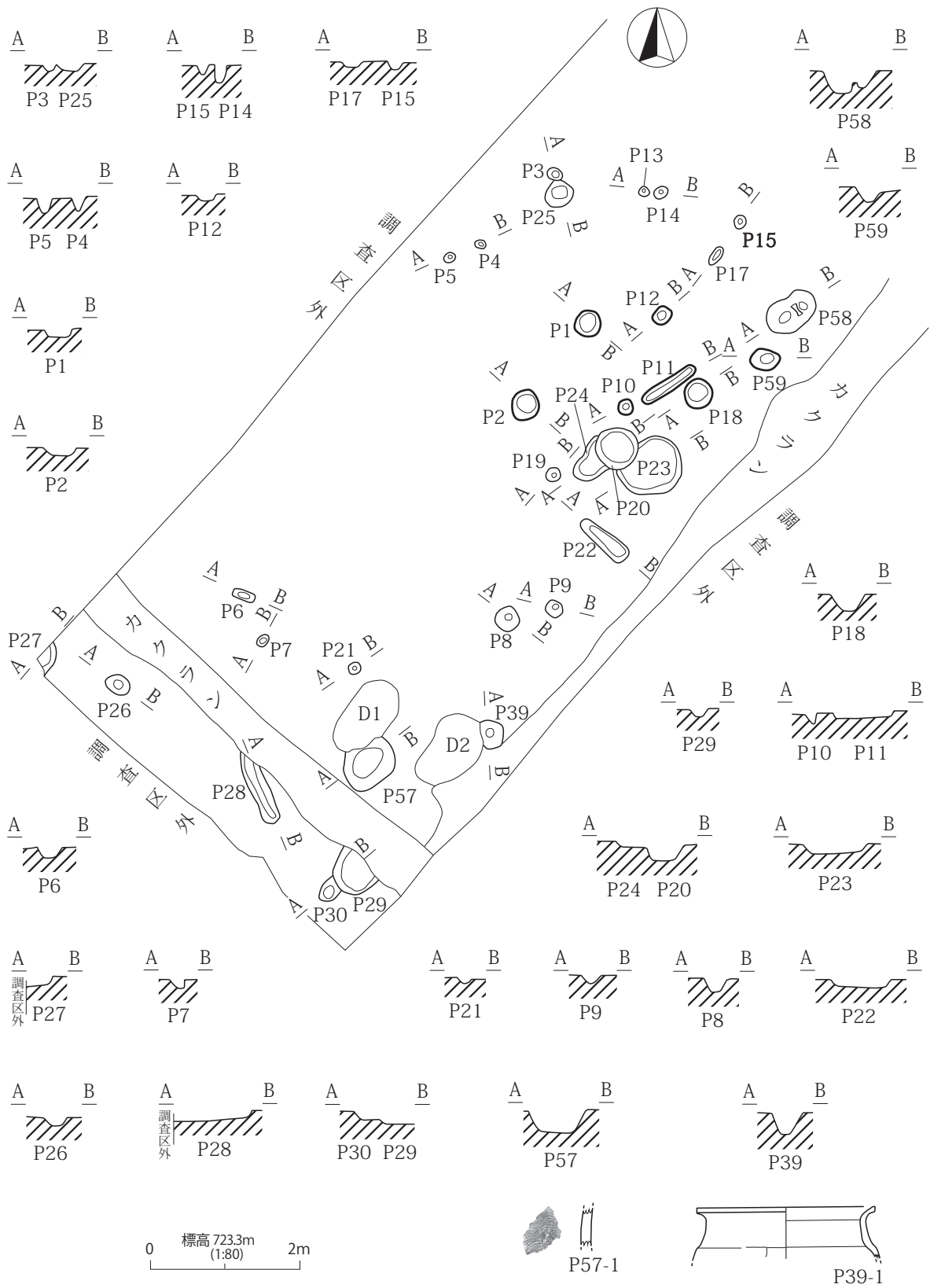
時期的には、平安時代10世紀後半のものと思われる。



P40 1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR6/3 少含。

P19・P31～P38・P40～P56

第6図 ピット (1)



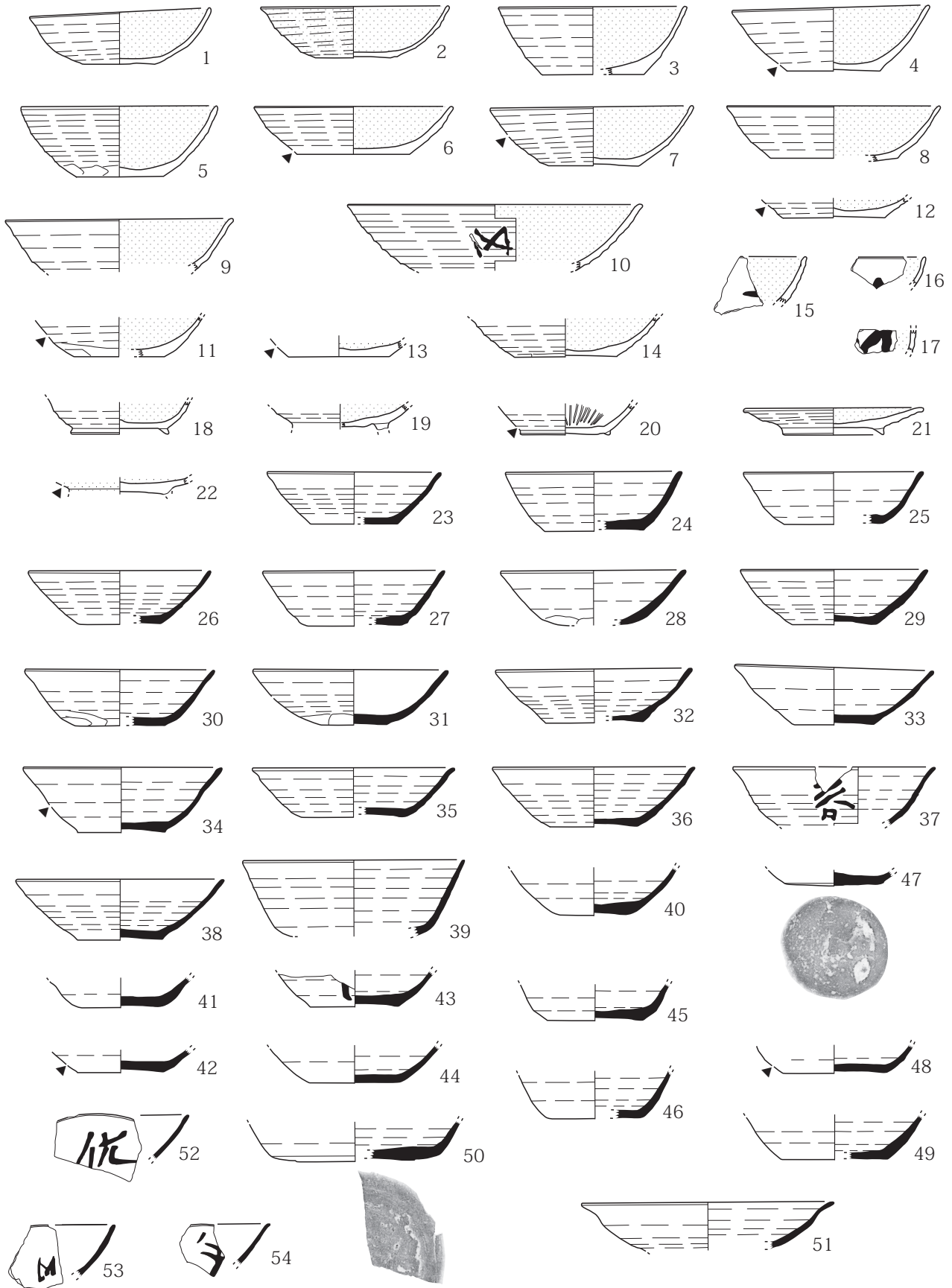
P1 ~ P15 · P17 · P18 · P20 ~ P30 · P39 · P57 ~ P59

第7図 ピット (2)

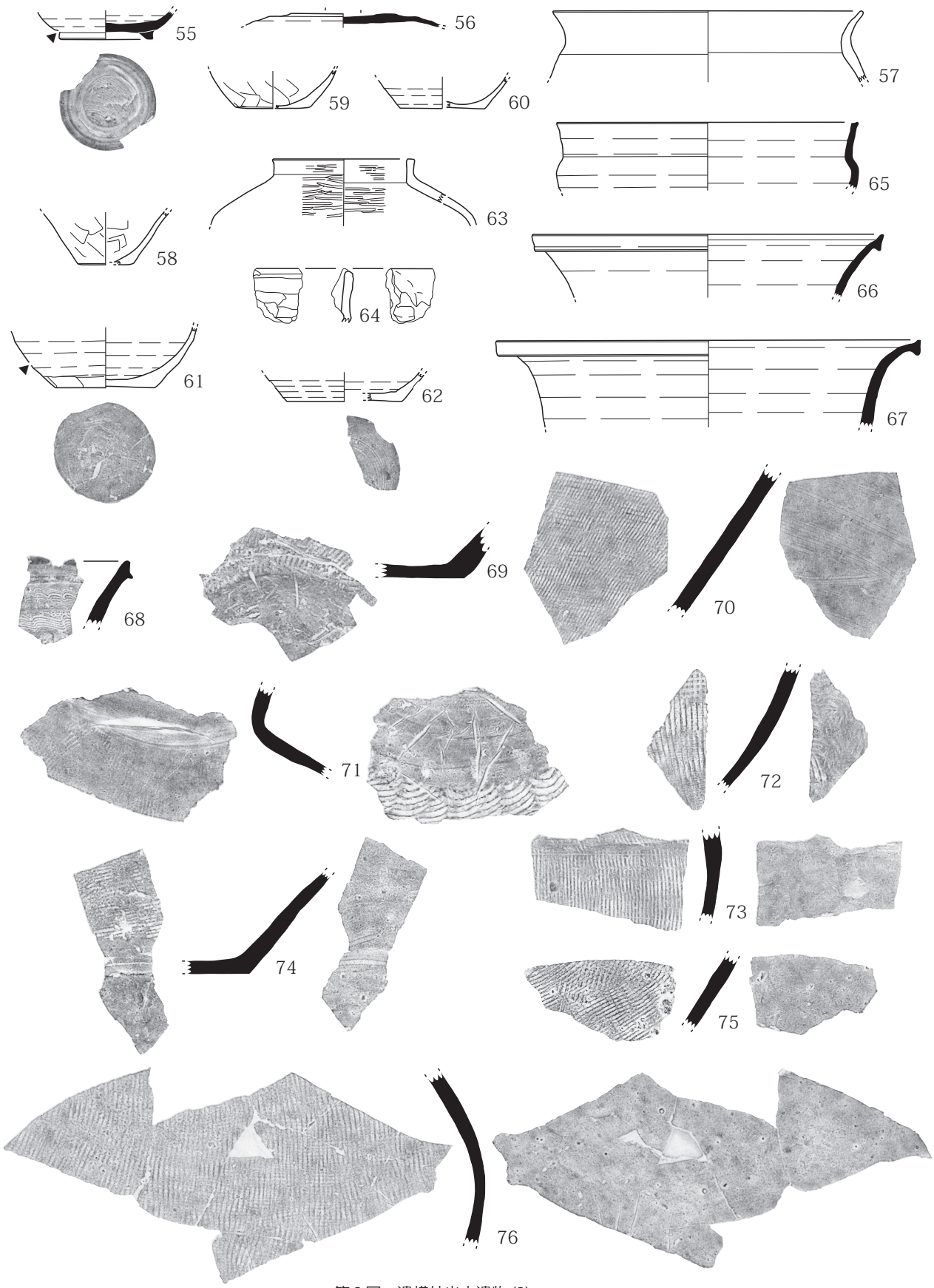
第6表 ビット計測表

No	検出位置	長径×短径	深度	覆土		備考
P1	Ⅳ-J-2	0.37×0.35	0.11	10YR6/3	10YR7/2 含	
P2	Ⅲ-A-1	0.43×0.4	0.12	10YR6/3	10YR7/2 含	
P3	Ⅳ-J-1・2	0.2×0.2	0.07	10YR6/3	10YR7/2 含	P25 を切る
P4	Ⅳ-J-1	0.16×0.14	0.19	10YR6/3	10YR7/2 少含	
P5	Ⅳ-J-1	0.16×0.13	0.20	10YR6/3	10YR7/2 少含	
P6	Ⅰ-A-10	0.32×0.15	0.15	10YR6/3	10YR7/2 含	
P7	Ⅰ-A-10	0.18×0.15	0.10	10YR6/3	10YR7/2 含	
P8	Ⅲ-A-1	0.34×0.31	0.19	10YR6/3	10YR7/2 含	
P9	Ⅲ-A-1・2	0.26×0.22	0.11	10YR6/3	10YR7/2 含	
P10	Ⅲ-A-2	0.20×0.18	0.11	10YR6/3	10YR7/2 少含	
P11	Ⅲ-A-2	0.83×0.17	0.07	10YR6/3	10YR7/2 少含	
P12	Ⅳ-J-2	0.25×0.2	0.07	10YR6/3	10YR7/2 含	
P13	Ⅳ-J-2	0.17×0.13	0.17	10YR6/3	10YR7/2 少含	
P14	Ⅳ-J-2	0.18×0.16	0.26	10YR6/3	10YR7/2 少含	
P15	Ⅳ-J-2	0.18×0.14	0.08	10YR6/3	10YR7/2 含	
P17	Ⅳ-J-2	0.28×0.15	0.06	10YR6/3	10YR7/2 含	
P18	Ⅲ-A-2	0.43×0.41	0.26	10YR6/3	10YR7/2 含	
P19	Ⅲ-A-2	0.23×0.19	0.05	10YR6/3	10YR7/2 含	
P20	Ⅲ-A-2	0.58×0.55	0.19	10YR6/3	10YR7/2 含	P23・P24 を切る
P21	Ⅲ-A-1	0.17×0.16	0.09	10YR6/3	10YR7/2 含	
P22	Ⅲ-A-2	0.77×0.20	0.10	10YR6/3	10YR7/2 含	M1 を切る
P23	Ⅲ-A-2	0.90×0.74	0.11	10YR6/3	10YR7/2 少含	P20 に切られる・M1 を切る
P24	Ⅲ-A-2	(0.65)×0.46	0.07	10YR6/3	10YR7/2 少含	P20 に切られる
P25	Ⅳ-J-1・2	0.42×0.35	0.10	10YR6/3	10YR7/2 少含	P3 に切られる
P26	Ⅰ-B-10	0.35×0.25	0.13	10YR6/3	10YR7/2 含	
P27	Ⅰ-A-10	(0.35)×(0.22)	0.14	10YR6/3	10YR7/2 含	調査区外
P28	Ⅰ-B-10	(1.10)×0.25	0.13	10YR6/3	10YR7/2 含	カクランに切られる
P29	Ⅲ-B-1	0.64×(0.51)	0.21	10YR6/3	10YR7/2 含	カクランに切られる・P30 を切る
P30	Ⅲ-B-1	(0.30)×0.26	0.11	10YR6/3	10YR7/4 シルト含	P29 に切られる
P31	Ⅳ-G-3	0.29×(0.13)	0.10	10YR6/3	10YR3/2 粒子少含	調査区外
P32	Ⅳ-H-3	0.23×0.19	0.48	10YR6/3	10YR3/2 粒子少含	
P33	Ⅳ-H-3	0.20×0.18	0.27	10YR6/3	10YR3/2 粒子少含	
P34	Ⅳ-H-3	0.26×(0.13)	0.18	10YR6/3	10YR3/2 粒子少含	調査区外
P35	Ⅳ-H-3	0.17×0.15	0.32	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P36	Ⅳ-H-3	0.20×(0.15)	0.18	10YR6/4	10YR7/2 少含	調査区外
P37	Ⅳ-H-3	0.25×0.24	0.09	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P38	Ⅳ-H-3	0.24×0.20	0.42	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P39	Ⅲ-B-1	0.38×0.33	0.31	10YR6/4	10YR7/2 少含	D2 に切られる・M1 を切る
P40	Ⅳ-J-2	0.33×0.24	0.37	10YR4/2	10YR6/3 少含	M1 を切る
P41	Ⅳ-J-2	0.46×0.36	0.20	10YR4/3	10YR7/4 少含	M1 を切る
P42	Ⅳ-H-3	0.30×0.28	0.49	10YR7/4	10YR4/6 含	
P43	Ⅳ-I-3	0.50×0.25	0.16	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P44	Ⅳ-I-3	0.53×0.41	0.32	10YR3/2	砂利少含	
P45	Ⅳ-I-3	0.25×0.23	0.27	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P46	Ⅳ-H-3	0.57×0.35	0.17	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P47	Ⅳ-H-3	0.40×0.20	0.27	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P48	Ⅳ-H-3	0.19×0.15	0.12	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P49	Ⅳ-H-2	0.44×0.11	0.18	10YR6/4	10YR7/2 少含	調査区外
P50	Ⅳ-I-2	0.27×0.25	0.23	10YR6/4	10YR7/2 少含	調査区外
P51	Ⅳ-I-3	0.20×0.14	0.05	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P52	Ⅳ-I-3	0.44×0.16	0.05	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P53	Ⅳ-I-3	0.60×0.30	0.10	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P54	Ⅳ-I-2	0.53×0.37	0.07	10YR6/4	10YR7/2 少含	
P55	Ⅳ-I-2	(0.41)×0.20	0.09	10YR6/4	10YR7/2 少含	調査区外
P56	Ⅳ-J-2	0.49×0.38	0.17	10YR6/4	10YR7/2 少含	M1 を切る
P57	Ⅲ-B-1	0.74×(0.57)	0.31	10YR6/4	10YR7/2 少含	D1 に切られる
P58	Ⅳ-J-2	0.72×0.41	0.38			M1 を切る
P59	Ⅳ-J-2	0.40×0.27	0.25			M1 を切る

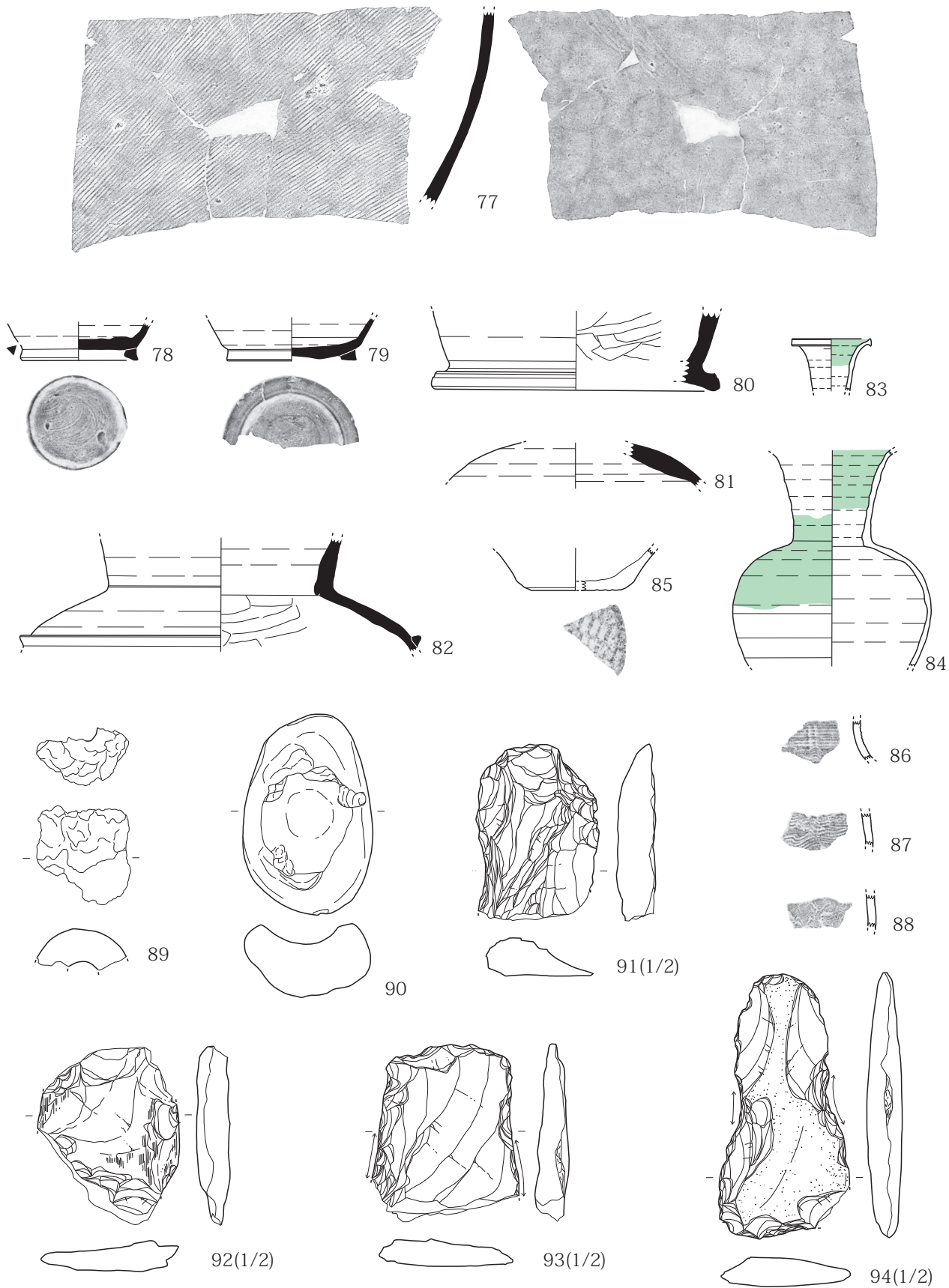




第8図 遺構外出土遺物(1)



第9図 遺構外出土遺物(2)



第10図 遺構外出土遺物 (3)

第7表 遺構外出土遺物観察表(1)

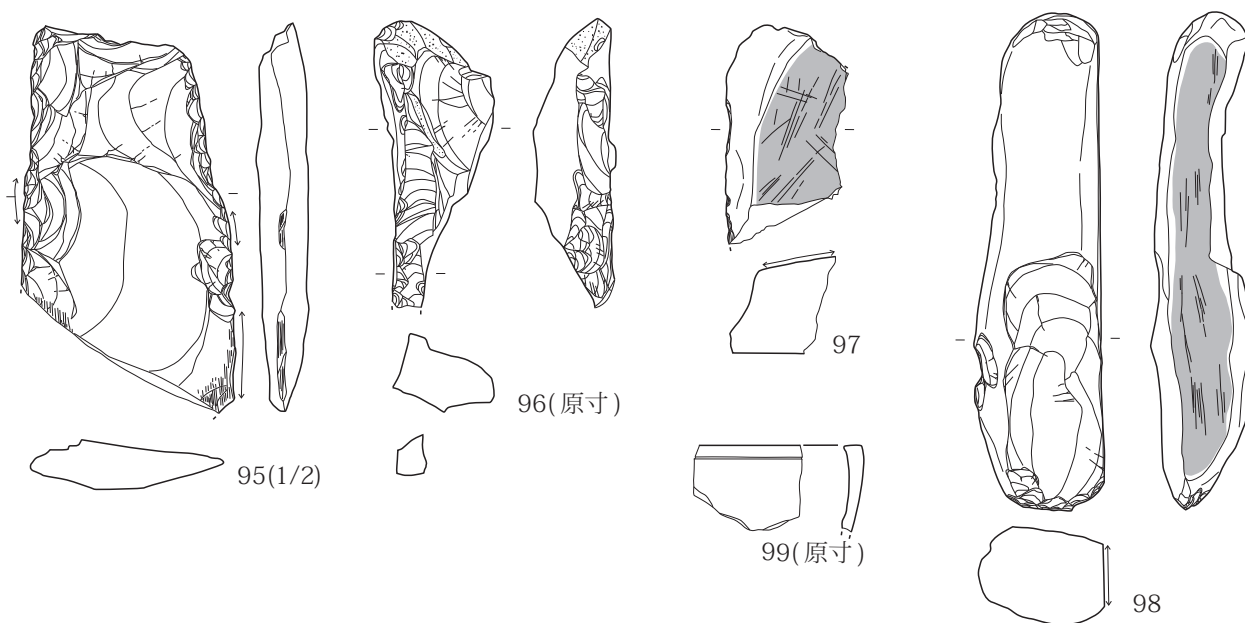
No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内 面	外 面		
1	土師器	坏	12.9	5.0	3.7	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切?・ナデ	完全実測	Ⅲ -D-4
2	土師器	坏	13.4	5.3	3.7	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切→黒色処理	完全実測	Ⅲ -D-4
3	土師器	坏	(13.4)	(7.2)	4.8	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ -E-3
4	土師器	坏	(14.0)	6.6	4.5	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切・ナデ	完全実測	Ⅲ -D-4・Ⅲ -E-3
5	土師器	坏	(14.0)	(6.2)	5.0	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部・底部周縁ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ -E-3
6	土師器	坏	(14.2)	8.0	3.4	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ -E-3
7	土師器	坏	(14.5)	6.4	4.2	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全実測	Ⅲ -E-3・Ⅲ -D-4
8	土師器	坏	(15.2)	(9.0)	<3.9>	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ -F-2
9	土師器	坏	(16.2)	—	<3.7>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	Ⅳ -F-5・Ⅳ -H-3
10	土師器	坏	(21.0)	—	<4.7>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・「墨書」	回転実測	Ⅲ -D-4・Ⅲ -E-3
11	土師器	坏	—	6.4	<2.8>	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ -D-4・Ⅲ -E-3
12	土師器	坏	—	7.2	<1.4>	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ -D-4・Ⅲ -E-3
13	土師器	坏	—	7.2	<1.5>	—	ヘラミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ -D-4・Ⅲ -E-3
14	土師器	坏	—	(7.2)	<2.7>	—	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切→底部～周縁ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ -D-3・Ⅲ -D-4・Ⅳ -F-2
15	土師器	坏	—	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・「墨書」	破片実測	Ⅲ -D-4
16	土師器	坏	—	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・「墨書」	破片実測	Ⅲ -E-3
17	土師器	坏	—	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・「墨書」	破片実測	Ⅲ -D-4
18	土師器	碗	—	(6.8)	<2.3>	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切→付高台	回転実測	Ⅲ -E-3
19	土師器	碗	—	—	<1.8>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→付高台	回転実測	Ⅳ -F-5
20	土師器	碗	—	6.2	<2.2>	—	放射暗文	回転ヘラケズリ→付高台	完全実測	Ⅲ -E-3
21	土師器	皿	12.8	7.0	1.9	—	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切→付高台	完全実測	Ⅲ -E-3
22	土師器	皿	—	—	<1.2>	—	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ→黒色処理、付高台	完全実測	Ⅲ -F-2
23	須恵器	坏	(12.4)	(6.2)	(3.7)	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -D-4
24	須恵器	坏	(12.6)	(7.2)	(4.2)	—	ロクロナデ・火襷	回転糸切→火襷	回転実測	Ⅲ -D-4
25	須恵器	坏	(12.8)	(7.0)	(3.7)	—	ロクロナデ	回転糸切→火襷	回転実測	Ⅲ -E-3
26	須恵器	坏	(13.0)	(6.2)	(3.8)	—	ロクロナデ・火襷	回転糸切→火襷	回転実測	Ⅲ -D-4
27	須恵器	坏	(13.0)	(7.6)	(3.9)	—	ロクロナデ・火襷	右回転糸切り・火襷	回転実測	Ⅲ -D-4
28	須恵器	坏	(13.2)	(5.2)	(3.9)	—	ロクロナデ・火襷	体部下端ヘラケズリ・火襷	回転実測	シクツ
29	須恵器	坏	(13.4)	(6.0)	3.9	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -E-3
30	須恵器	坏	(13.6)	(6.4)	(4.0)	—	ロクロナデ	底部ヘラケズリ	回転実測	シクツ
31	須恵器	坏	(13.9)	4.8	3.9	—	ロクロナデ・火襷	ロクロナデ・火襷・	完全実測	Ⅲ -D-4
32	須恵器	坏	(14.0)	(7.9)	(3.8)	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -D-4
33	須恵器	坏	14.2	5.8	4.1	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -E-3
34	須恵器	坏	(14.2)	6.2	4.6	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	Ⅲ -D-4
35	須恵器	坏	(14.4)	(7.4)	(3.5)	—	ロクロナデ・火襷	右回転糸切	完全実測	Ⅲ -E-3
36	須恵器	坏	(14.4)	(6.2)	4.2	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -D-4
37	須恵器	坏	(14.4)	—	<4.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ・「墨書」	回転実測	Ⅲ -E-3
38	須恵器	坏	(14.8)	(6.0)	4.3	—	ロクロナデ・火襷	右回転糸切り・火襷	回転実測	Ⅲ -D-4
39	須恵器	坏	(15.8)	—	(5.4)	—	ロクロナデ・火襷	ロクロナデ・火襷	回転実測	Ⅲ -E-3
40	須恵器	坏	—	(5.8)	<3.4>	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -F-2
41	須恵器	坏	—	(6.0)	<2.1>	—	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	Ⅲ -D-4
42	須恵器	坏	—	6.2	<1.6>	—	ロクロナデ・火襷	右回転糸切り・火襷	完全実測	Ⅳ -I-3
43	須恵器	坏	—	6.3	<2.6>	—	ロクロナデ	「墨書」・右回転糸切	完全実測	Ⅲ -E-3
44	須恵器	坏	—	(6.4)	<2.7>	—	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	Ⅲ -D-4
45	須恵器	坏	—	(6.8)	<2.6>	—	ロクロナデ・火襷	火襷・回転糸切	回転実測	Ⅲ -F-2
46	須恵器	坏	—	(7.0)	(3.4)	—	ロクロナデ・火襷	回転糸切	回転実測	Ⅳ -H-3
47	須恵器	坏	—	7.1	<1.3>	—	ロクロナデ	回転ヘラ切	完全実測・拓本	Ⅲ -F-3
48	須恵器	坏	—	7.4	<2.0>	—	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	Ⅲ -E-3
49	須恵器	坏	—	(7.6)	<3.2>	—	ロクロナデ・火襷	回転糸切→火襷	回転実測	Ⅲ -D-3
50	須恵器	坏	—	(12.0)	<2.8>	—	ロクロナデ	回転ヘラ切	回転実測・拓本	Ⅲ -F-2
51	須恵器	坏	—	(18.0)	(3.4)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -F-2
52	須恵器	坏	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ・「墨書」	破片実測	Ⅲ -D-4
53	須恵器	坏	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ・「墨書」	破片実測	Ⅲ -F-3
54	須恵器	坏	—	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ・「墨書」	破片実測	Ⅲ -D-4
55	須恵器	有台坏	—	6.7	<2.1>	—	ロクロナデ	回転糸切→付高台	完全実測・拓本	Ⅲ -D-4
56	須恵器	坏蓋	—	—	<1.0>	—	ロクロナデ・火襷	ロクロナデ・火襷	回転実測	Ⅲ -E-3・Ⅲ -F-2
57	土師器	ロクロ襷	(22.2)	—	<5.1>	—	摩耗	摩耗	回転実測	Ⅲ -E-3・Ⅲ -D-3
58	土師器	武蔵襷	—	(4.0)	<3.8>	—	ヘラナデ	ヘラケズリ・外面にすず付着	回転実測	Ⅲ -F-2
59	土師器	武蔵襷	—	(5.4)	<2.7>	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ -F-2
60	土師器	ロクロ襷	—	(6.0)	<2.3>	—	摩耗	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -F-3
61	土師器	ロクロ襷	—	7.1	<4.3>	—	ロクロナデ	底部～周縁ヘラケズリ	完全実測・拓本	Ⅲ -F-2
62	土師器	襷	—	(8.2)	<2.1>	—	ロクロナデ	回転糸切	回転実測・拓本	Ⅲ -E-3
63	土師器	壺	(10.2)	—	<4.8>	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ -E-3・Ⅲ -D-4
64	土師器	内耳鍋	—	—	<3.9>	—	—	—	破片実測	Ⅳ -H-3

第8表 遺構外出土遺物観察表(2)

No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内 面	外 面		
65	須恵器	甕	(21.6)	—	<4.9>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -E-3
66	須恵器	甕	(25.2)	—	<4.5>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -E-3
67	須恵器	甕	(30.4)	—	<6.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -E-3
68	須恵器	甕	—	—	—	—	ナデ	櫛描波状文	破片実測・拓本	Ⅲ -F-3
69	須恵器	甕	—	—	—	—	ヘラナデ	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -D-4
70	須恵器	甕	—	—	—	—	ヘラナデ	平行叩目	破片実測・拓本	覆土
71	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕(同心円文)	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -E-3
72	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -F-2
73	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -D-4
74	須恵器	甕	—	—	—	—	ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -D-4
75	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -E-3
76	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -D-4・Ⅲ -E-3・Ⅲ -F-2
77	須恵器	甕	—	—	—	—	当具痕	平行叩目	破片実測・拓本	Ⅲ -E-3
78	須恵器	壺	—	8.3	<2.7>	—	ロクロナデ	右回転系切→周縁回転ヘラケズリ	完全実測	Ⅲ -D-4
79	須恵器	壺	—	(9.2)	<3.0>	—	ロクロナデ	回転系切→付高台	回転実測・拓本	Ⅲ -E-3
80	須恵器	壺	—	(20.4)	<5.6>	—	ヘラナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -E-3
81	須恵器	壺	—	—	<3.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅳ -I-2
82	須恵器	突帯付四耳壺	—	—	<8.0>	—	ヘラナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -D-3
83	灰釉陶器	壺	(5.6)	—	<3.7>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -D-4
84	灰釉陶器	壺	—	—	<15.2>	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ -D-3
85	縄文土器	—	—	<7.2>	<3.0>	—	剥離	底部網代痕・ナデ	回転実測・拓本	シクツ・143-1A
86	弥生土器	甕	—	—	—	—	摩耗	櫛描波状文	破片実測・拓本	Ⅲ -F-2
87	弥生土器	甕	—	—	—	—	ナデ	櫛描波状文	破片実測・拓本	Ⅲ -E-3
88	弥生土器	甕	—	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	Ⅲ -D-4
89	土製品	羽口	—	—	—	—	周辺部欠損・先端部還元		破片実測	Ⅲ -E-3
90	石器製品	凹石	14.1	9.2	6.4	659.48	凹φ7.0×6.5・凹深1.4		完全実測	Ⅲ -D-3
91	石器製品	打製石斧	<6.2>	<4.3>	<1.3>	<41.81>	基部残存		完全実測	Ⅲ -F-2
92	石器製品	打製石斧	<6.3>	<5.0>	<1.1>	<38.20>	上下欠損・摩滅部分あり、使用痕か		完全実測	Ⅲ -E-3
93	石器製品	打製石斧	<6.3>	<5.2>	<1.0>	<39.67>	下部欠損・両側に潰れ		完全実測	Ⅲ -D-3
94	石器製品	打製石斧	<9.3>	<4.6>	1.1	<56.03>	一部欠損・自然面残る・両側に潰れ痕		完全実測	Ⅲ -D-3
95	石器製品	打製石斧	<10.3>	<5.6>	<1.3>	<84.93>	刃部欠損・両側と刃部に摩滅痕		完全実測	Ⅲ -E-3
96	石器製品	石錘	<3.8>	1.6	1.0	<4.23>	先端部欠損、黒曜石		完全実測	Ⅲ -D-4
97	石器製品	磨石	<11.6>	<6.5>	<5.0>	<441.50>	右 or 下側欠損・磨り面に、擦痕あり		完全実測	Ⅲ -F-2
98	石器製品	磨・敲石	26.4	6.8	4.9	1160.59	磨り面・両端部に敲打痕		完全実測	Ⅲ -E-3
99	金属製品	銅碗	<1.1>	<1.4>	<0.2>	<1.98>	口縁のこる、沈線?		完全実測	Ⅳ -G-3
100	木製品	板材	<3.4>	<1.8>	<0.15>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
101	木製品	板材	<4.4>	<2.6>	<0.15>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
102	木製品	板材	<10.0>	<2.3>	<0.2>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
103	木製品	板材	<3.3>	<1.1>	<0.15>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
104	木製品	板材	<6.0>	<1.1>	<0.15>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
105	木製品	板材	<7.0>	<1.9>	<0.35>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
106	木製品	板材	<10.3>	<1.4>	<0.4>	—	両端欠損・板状・一部摩滅、使用痕?		完全実測	Ⅲ -D-4
107	木製品	板材	<12.5>	<1.8>	<0.4>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
108	木製品	板材	<10.1>	<3.5>	<0.35>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
109	木製品	板材	<20.9>	<5.1>	<0.7>	—	両端欠損・板状、中央に一孔、孔φ0.9×0.4		完全実測	Ⅲ -D-4
110	木製品	木器?	<4.1>	<1.4>	<0.4>	—	片端欠損・裾が広がる板状		完全実測	Ⅲ -D-4
111	木製品	板材	<8.4>	<1.5>	<0.7>	—	両端欠損・角柱状		完全実測	Ⅲ -D-4
112	木製品	板材	<8.7>	<2.6>	<0.25>	—	両端欠損・段差のある板状		完全実測	Ⅲ -D-4
113	木製品	板材	<15.0>	<1.9>	<0.7>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
114	木製品	板材	<13.2>	<2.0>	<0.7>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
115	木製品	板材	<14.1>	<2.2>	<0.9>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
116	木製品	木器	<9.6>	<1.0>	<0.5>	—	両端欠損・片端が薄い板状、端部が尖る		完全実測	Ⅲ -D-4
117	木製品	木器	<19.6>	<2.3>	<2.5>	—	片端欠損・板状・一端は円柱状に加工・先端は尖る、付着物あり?		完全実測	Ⅲ -D-4
118	木製品	板材	<18.3>	<3.8>	<1.4>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
119	木製品	板材	14.5	7.3	4.8	—	片端が斜めの角柱状・加工痕のこる・一部被熱、側面に溝		完全実測	Ⅲ -D-4
120	木製品	板材	<20.5>	<8.7>	<2.2>	—	片端欠損・断面三角形の板状		完全実測	Ⅲ -D-4
121	木製品	木器	<8.6>	<1.6>	<0.7>	—	片端欠損・一端が挟まる板状・側面に加工痕・先端被熱		完全実測	Ⅲ -D-4
122	木製品	木器	<14.3>	<2.4>	<2.1>	—	両端欠損・角柱状 or 楕円状		完全実測	Ⅲ -D-4
123	木製品	板材	<9.8>	<1.1>	<0.5>	—	両端欠損・角柱状		完全実測	Ⅲ -D-4
124	木製品	板材	<11.8>	<2.6>	<0.5>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
125	木製品	板材	<10.9>	<1.5>	<1.3>	—	両端欠損・板状		完全実測	Ⅲ -D-4
126	木製品	板材	<43.0>	<27.7>	<6.0>	—	片端欠損・断面三角形の板状・端部に加工痕・正面にもノミ跡?あり		完全実測	Ⅲ -D-4
127	木製品	板材	<7.3>	<0.7>	<0.35>	—	片端欠損・角柱材・先端尖る		完全実測	Ⅲ -E-3
128	木製品	板材	<9.8>	<1.5>	<3.0>	—	片端欠損・板状・先端に加工		完全実測	Ⅲ -E-3

第9表 遺構外出土遺物観察表 (3)

No	器種	器形	法 量				成形・調整		備考	出土層位
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	(重量)	内 面	外 面		
129	木製品	板材	<13.7>	<2.3>	<0.7>	—	両端欠損・板状・先端に加工	完全実測	Ⅲ-E-3	
130	木製品	板材	<5.7>	<1.4>	<0.2>	—	両端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
131	木製品	板材	<7.6>	<1.5>	<0.35>	—	両端欠損・片側が薄い	完全実測	Ⅲ-E-3	
132	木製品	板材	<8.2>	<0.7>	<0.35>	—	両端欠損・角柱状	完全実測	Ⅲ-E-3	
133	木製品	板材	<11.4>	<1.2>	<0.6>	—	両端欠損・紡錘形・上部に加工痕?	完全実測	Ⅲ-E-3	
134	木製品	板材	<14.3>	<0.9>	<1.0>	—	両端欠損・角柱材	完全実測	Ⅲ-E-3	
135	木製品	板材	<13.0>	<1.6>	<1.2>	—	両端欠損・角柱材	完全実測	Ⅲ-E-3	
136	木製品	板材	<17.8>	<2.5>	<0.7>	—	両端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
137	木製品	板材	<40.4>	<4.0>	<2.3>	—	片端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
138	木製品	板材	<48.0>	<3.3>	<1.1>	—	片端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
139	木製品	板材	<40.7>	<4.3>	<0.9>	—	片端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
140	木製品	板材	<20.3>	<5.4>	<0.8>	—	両端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
141	木製品	板材	<72.6>	<13.1>	<1.2>	—	片端欠損・板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
142	木製品	扉部材	<155.1>	<4.1>	<1.5>	—	両端欠損・正裏面に凹のある板状	完全実測	Ⅲ-E-3	
143	木製品	扉部材	147.9	20.4	6.5	—	征目素材・臍放し	完全実測	Ⅲ-E-3	



第11図 遺構外出土遺物 (4)

●縄文土器 (第10図)

85の深鉢底部片が1点出土している。底部には網代痕が認められ、後期の所産と思われる。

●弥生土器 (第10図)

86～88の甕片が3点出土した。櫛描簾状文や波状文が施される。後期箱清水式である。

●土製品 (第10図)

89の轡の羽口片が1点出土している。

●石器 (第10・11図)

凹石 (90)、打製石斧 (91～95)、石錐 (96)、磨石 (97)、磨・敲石 (98) が出土している。打製の石

器は弥生時代のものと思われるが、他のものは時期を特定できない。

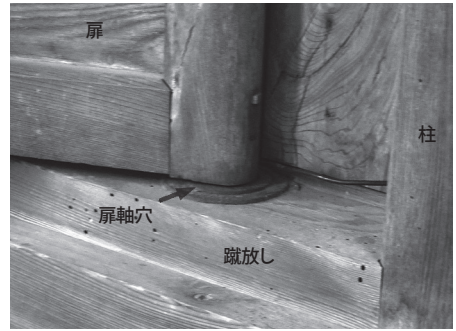
●金属製品（第 11 図）

外面口唇下に沈線が巡る銅碗の破片と思われるものが 1 点出土している。

●木器・木製品（第 12 図～ 14 図）

南側調査区の低地から木器・木製品が出土している。加工が認められない木も出土しているが、未図化である。樹種の鑑定は行っていないが、大半は針葉樹である。記録のため一旦室内で自然乾燥を行い、記録作成後霧吹きにより再度水分を補充し、バキュームシーラによりパックを行い保管した。加工材については赤外線カメラにより、墨書の有無を確認したが確認されなかった。薄い板状に加工したものが最も多い。117 は断面円形に加工された部分の端部が尖る加工が施され、もう一端は断面長方形に幅を増しているが、欠損している。122 も似たような形態である。木器の柄部分であろうか？ 127 や 128 のように先端を鋭く尖らせる加工が施されるものもある。斎串の先端部分のようでもある。132 のような細い角材に加工されたものは箸かもしれない。もっとも大きな 143 は扉部材の「蹴放し」であり、組み重なって出土した 142 はこれに伴う「扉当り」と思われる。端部の柱に当たる部分が円形に加工されていることから、円柱の建物に付属したものである。また扉の軸受け穴が二組穿たれており、一度改修されたことがうかがえる。円柱を用いる建築物で手前に開く、観音開きの扉を使用するのは神社の本殿の可能性が高く、本資料は用途が特定できる貴重な資料である。時期は平安時代を主体とする包含層から出土しており、平安時代のものと考えてよいと思われる。

木製品ではないが、植物の種子も出土している。種類はオニグルミとモモである。



現代の神社の「蹴放し」と扉軸穴の様子



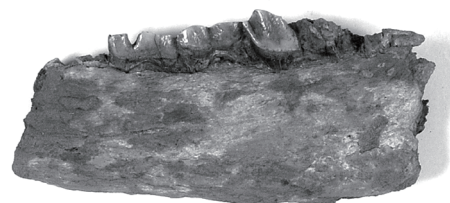
出土した種実

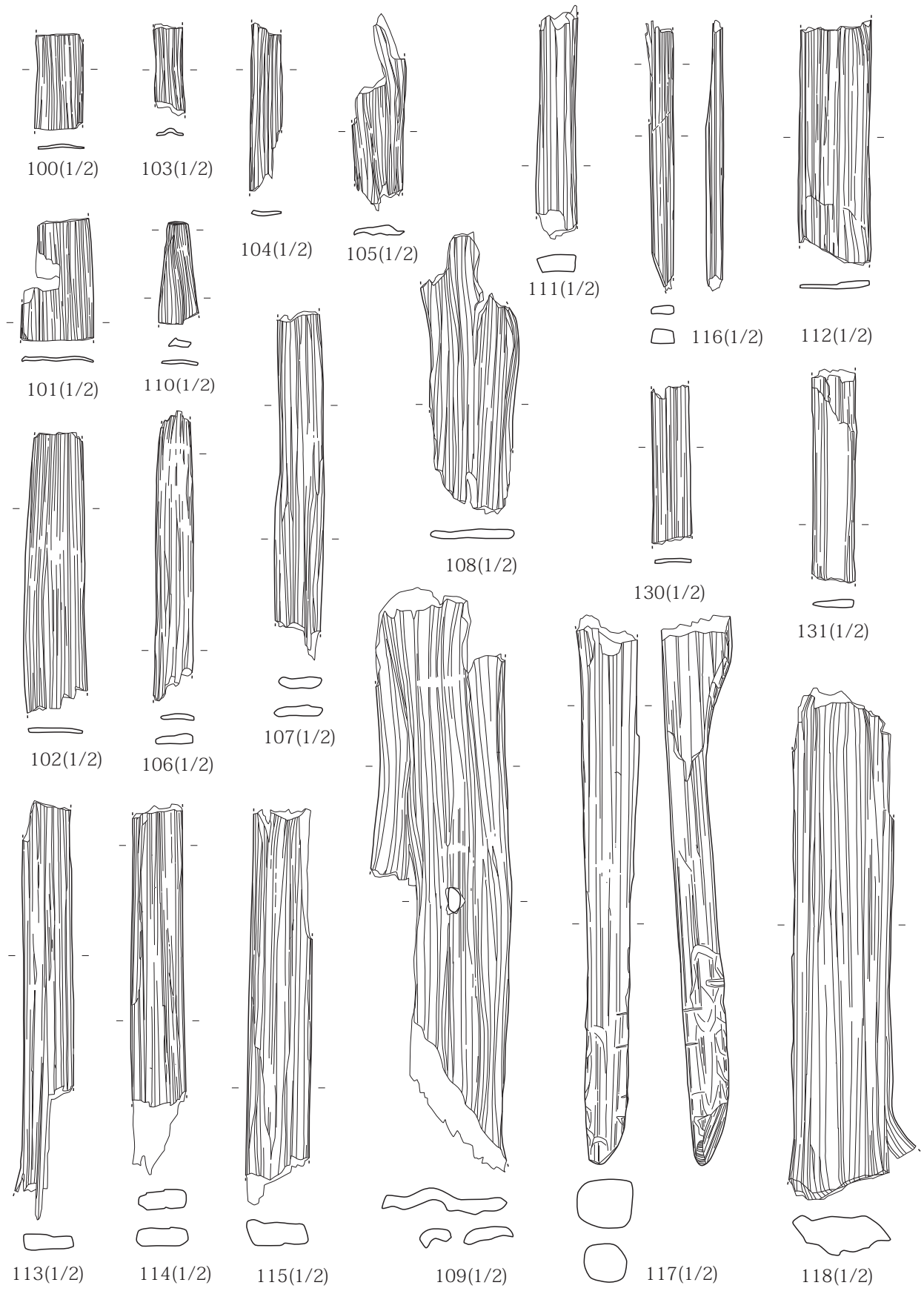
●獣骨

未図化であるが南側調査区の低地から獣骨が出土している。部位的には頭蓋骨や下顎骨、大腿骨、角の一部と思われるものである。角はニホンシカ、頭蓋骨や下顎骨は残存する歯の形状からウマとシカのもの確認できる。大腿骨は端部の関節部分が残存しないため判断できないが、ウマの可能性が高いように思われる。どのような事由によるものか分からないが、出土した骨は鮮やかなコバルトブルーを呈している。しかし、歯部分にはこのような変色は認められない。全ての資料に解体痕や加工痕は認められなかった。時期的には木材同様に平安時代のものと考えられる。



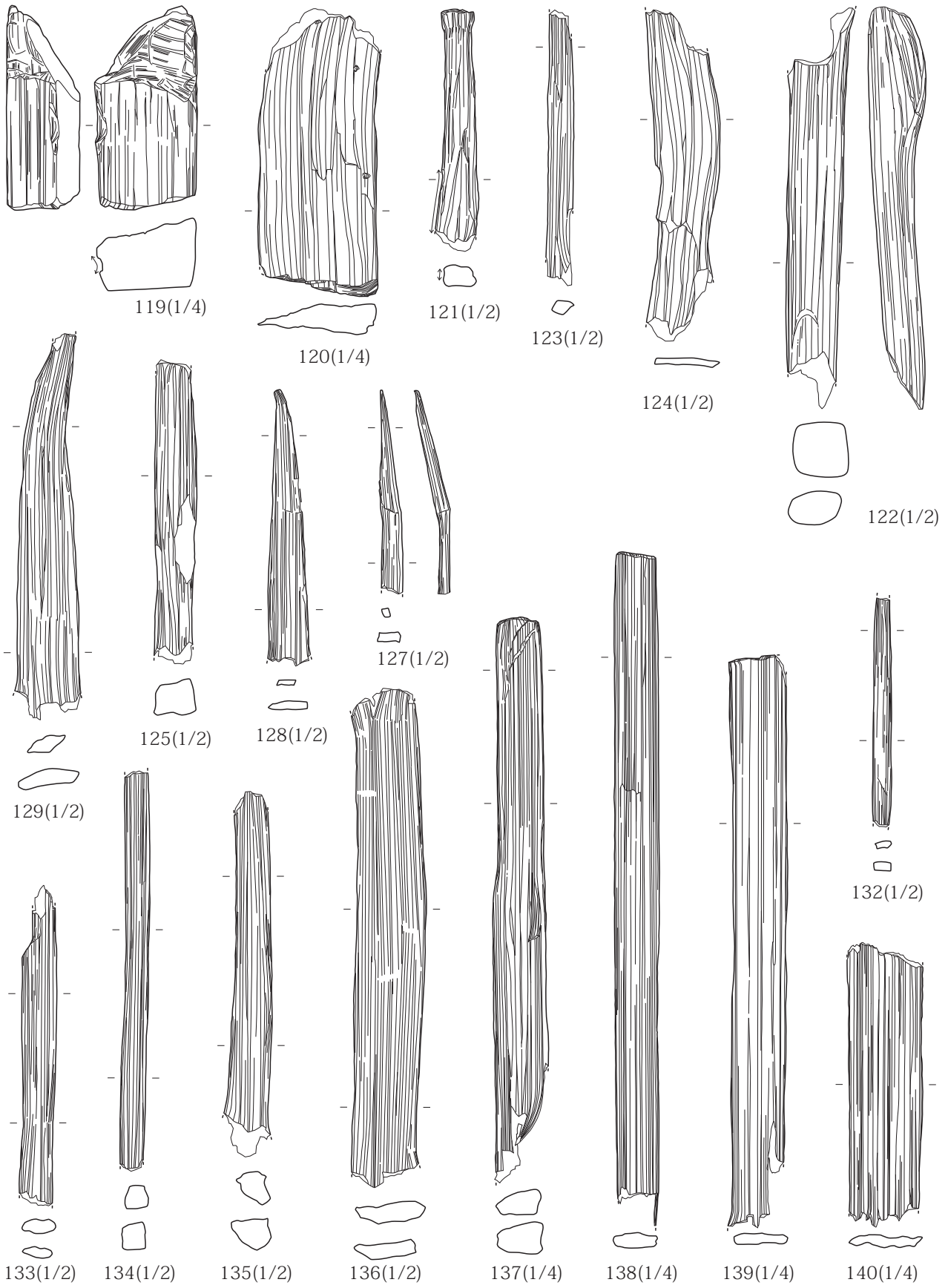
出土した獣骨（馬歯・鹿顎骨）



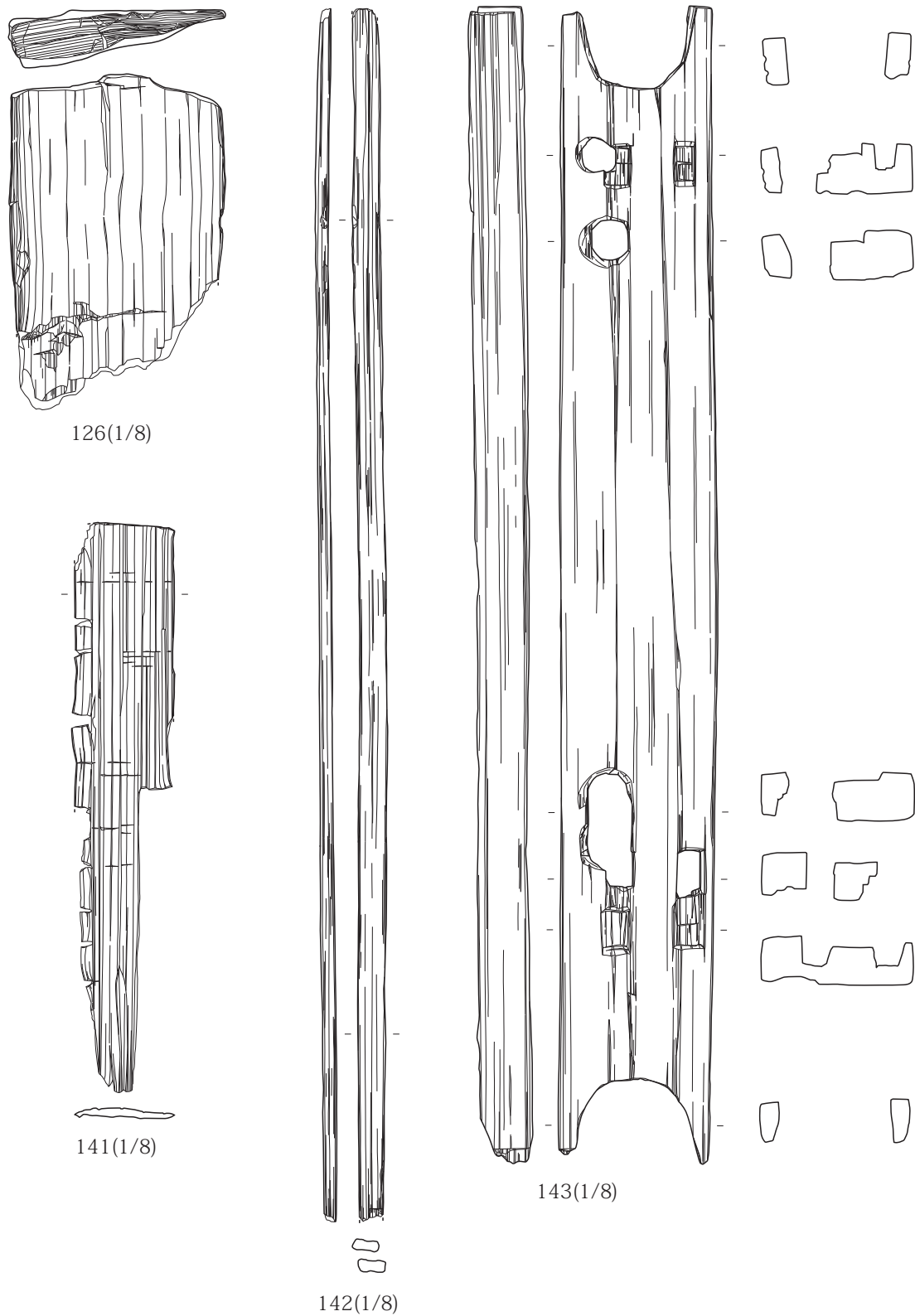


第12図 遺構外出土遺物(5)





第 13 图 遺構外出土遺物 (6)



第14図 遺構外出土遺物(7)

## 第Ⅲ章 まとめ

家浦遺跡では今回の調査区の北西隣接地において平成 19 年に調査が実施されている。この第 I 次調査では溝址やピットなどが検出されており、今回の調査と同様な状況が伺える。今回の調査で検出された M1 号溝址は方形周溝墓の可能性が指摘できることから、第 I 次調査で検出されている溝址についても注意が必要である。M1 号溝址が立地する部分は、蓼科山麓から連なる尾根状の微高地端部であり、弥生時代の集落は西方の尾根上に営まれていたことが平成 21 年の和田遺跡の調査で明らかとなっている。出土した銅鏃については、M1 号溝址の項でも述べたように弥生時代後期のものと考えられる。佐久平南部には弥生時代の古い時期の遺物が既出資料として散見され、片貝川流域の開発は佐久平の弥生時代でも早い時期であることが近年明らかとなってきた。そのような経緯の中で、弥生時代後期にも力のある集団が存在していた可能性を感じさせる資料である。

建築材が出土した南側調査区の低湿地は、調査当初は塵捨場的な空間と考えていたが、出土器種の大半が坏類であること、出土獣骨が鹿、馬に限定されること、建築材が神社本殿の部材であることなどから祭祀場の可能性が強い。位置的には微高地端部の脇部分であり、湧水地であった可能性が強いことも一因である。

250㎡という小規模な調査であるが、弥生時代後期の銅鏃と、平安時代の銅碗、神社本殿扉材「蹴放し」の発見という、多大な成果が得られた調査であり、小田切の里の歴史的重要性を再認識させるものであった。

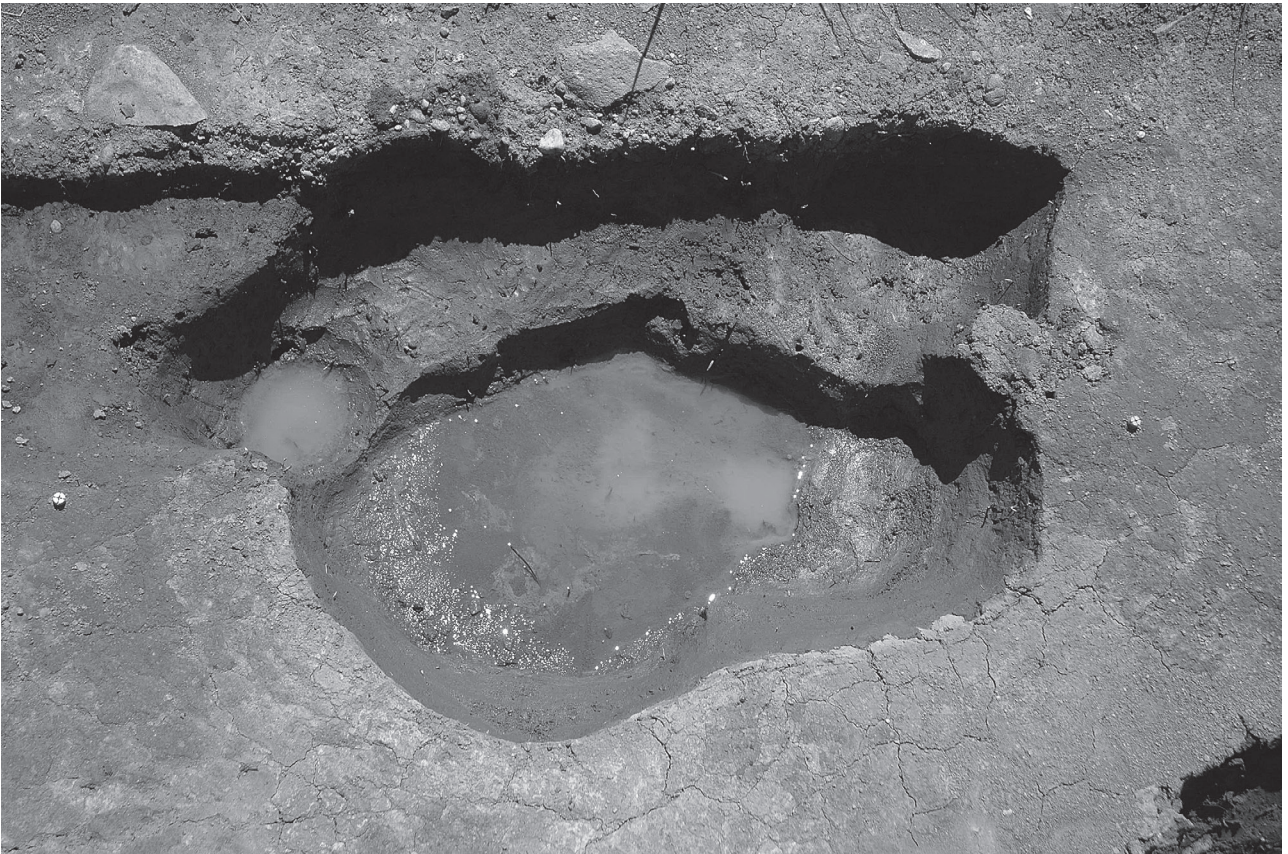
### 参考文献

- 考古学研究会 1991 「考古学研究 148 -松木武彦 前期古墳副葬鏃の成立と展開-
- 臼田町教育委員会 1988 「臼田町遺跡詳細分布調査報告書」
- 小学館 2003 「考古資料体系 6 -弥生・古墳時代 ガラス 青銅製品」
- 佐久市教育委員会 2005 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 126 集 「聖原一第 5 分冊」
- 奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター 2006 「動物考古学の手引き」
- 佐久市教育委員会 2008 「佐久市文化財 年報 16」
- 文化庁文化財部記念物課 2010 「発掘調査のてびき-整理・報告書編-
- 佐久市教育委員会 2010 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 179 集 「家浦遺跡」
- 佐久市教育委員会 2011 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 191 集 「和田遺跡」
- 早田啓子 2013 「一遍-その思想と生涯-
- 佐久市教育委員会 2014 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 224 集 「丸山遺跡」

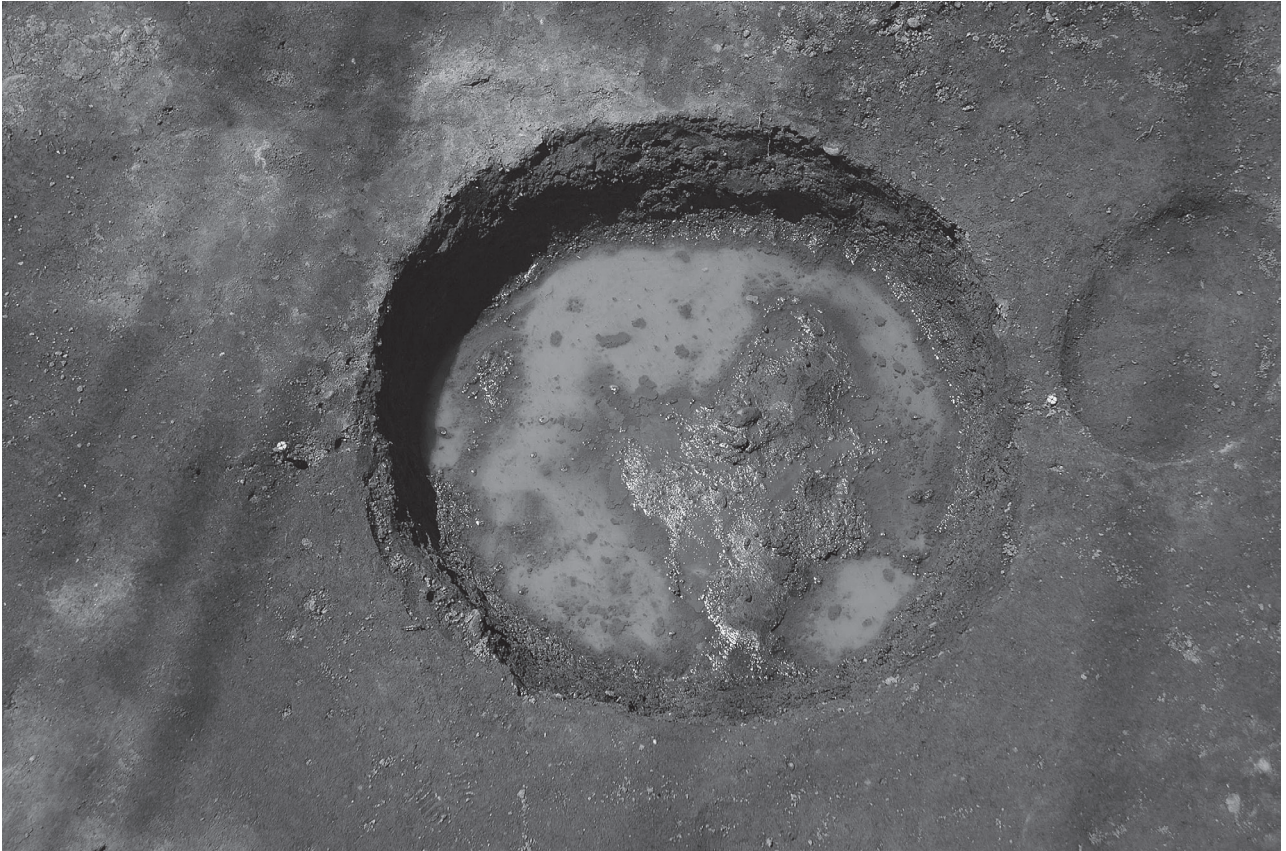
\* 弥生時代の遺構・遺物については、小山岳夫氏に教示を得た。神社の構造、特に本殿の扉構造について新海三社神社において興味深い教示を得た。



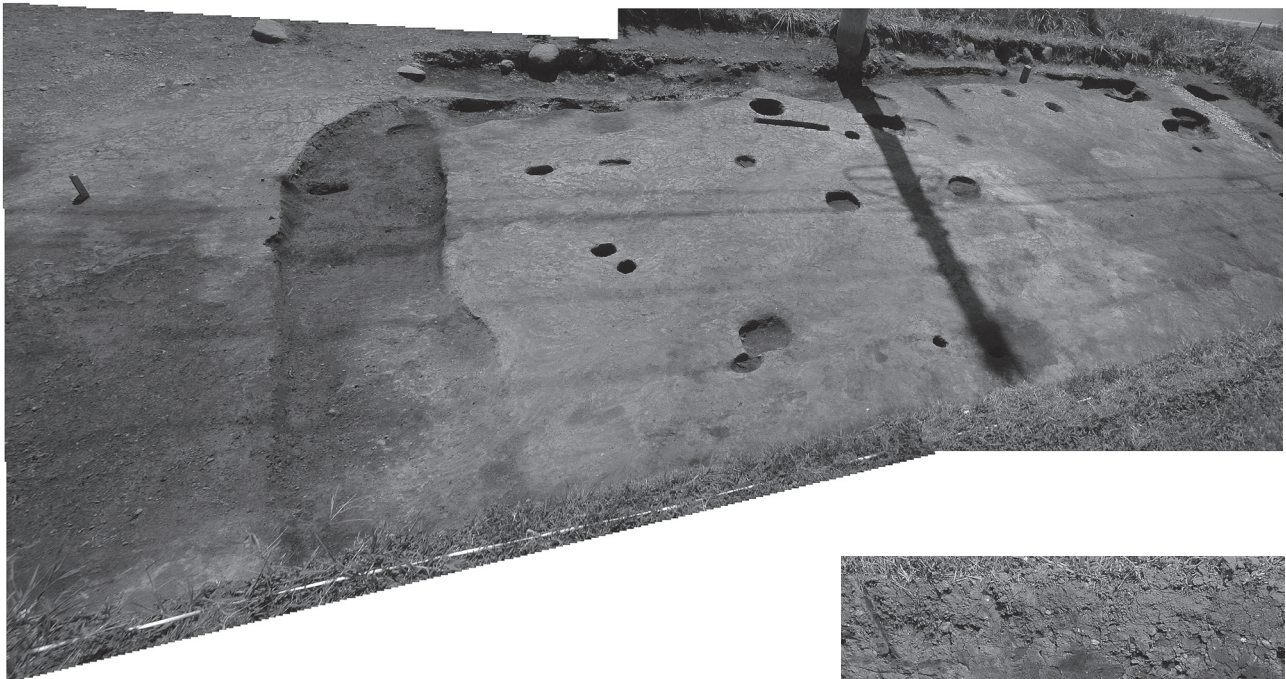
D 1 土坑完掘



D 2 土坑完掘



D3土坑完掘



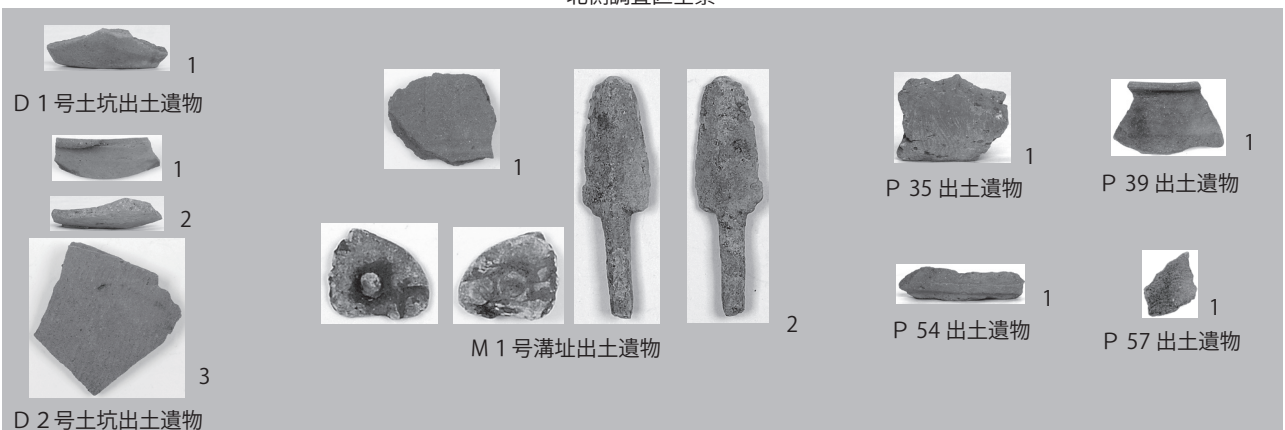
↑ M1号溝址完掘



M1号溝址セクション



北側調査区全景





南側調査区全景



南側調査区調査風景



1



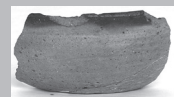
2



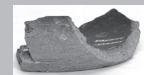
3



4



5



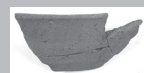
6



7

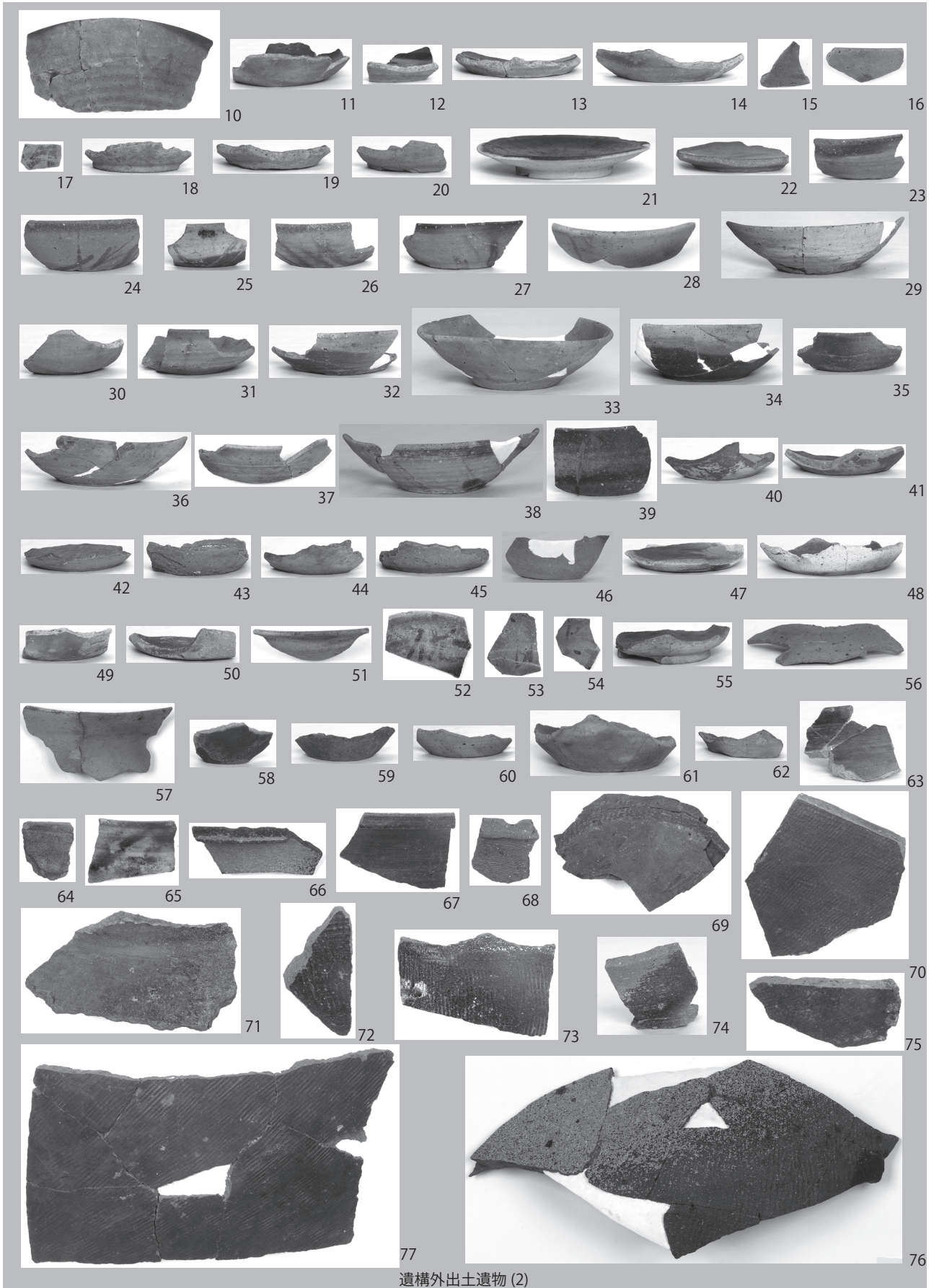


8



9

遺構外出土遺物(1)



遺構外出土遺物 (2)





遺構外出土遺物 (3)





126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141

遺構外出土遺物 (5)



142



143

遺構外出土遺物(6)

## 報 告 書 抄 録

ふ り が な	やうらいせき 2
書 名	家浦遺跡Ⅱ
シ リ ー ズ 名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 246 集
編 集 者 名	小林眞寿
編 集 機 関	佐久市教育委員会
発 行 機 関	佐久市教育委員会
発 行 年 月 日	20170331
郵 便 番 号	385-0006
電 話 番 号	0267-68-7321
住 所	長野県佐久市志賀 5953
ふ り が な	やうらいせき 2
遺 跡 名	家浦遺跡Ⅱ
ふ り が な	ながのけんさくししもおだぎり 865-1、297-1 のいちぶ
遺 跡 所 在 地	長野県佐久市下小田切 8 6 5 - 1、2 9 7 - 1 の一部
遺 跡 番 号	614
北 緯	36.11.11.5136
東 経	138.28.15.1323
調 査 期 間	20160725 - 20160817
調 査 原 因	道路築造
調 査 面 積	1,906㎡
種 別	集落遺跡
主 な 時 代	縄文～中世
遺 跡 概 要	遺構—土坑 3 (平安)、溝 1 (弥生)、ピット 57 (平安～中世) 遺物—土師器 (平安)、須恵器 (奈良・平安)、縄文土器 (後期)、弥生土器 (後期) 石器・石製品、銅製品、木材・木製品・種実、獣骨
特 記 事 項	弥生後期の銅鏃、平安時代の銅碗・建築材の発見

---

---

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第246集

家浦遺跡Ⅱ

平成29(2017)年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課文化財事務所

〒385-0006 長野県佐久市志賀 5953

TEL 0267-68-7321

印刷所

---

---